大阪府教育委員会文化財調査事務所年報

2

1999. 3

大阪府教育委員会

はじめに

何故、保護を必要とするのか？　如何なる理由で調査を必要とするのか？　調査の方法と範囲は何故そのようでなければならないのか？　調査の結果何が判ったのか？　それは現在の我々の生活とどのような関わりをもっているのか？　それによって何が社会に還元できたのか？

いま文化財保護行政は、このような、保護や調査を必要とすることについての明確な説明を、あらゆる場面で強く求められています。文化財を守るための説明責任が問われています。このような時に必要なことは、如何にして文化財を社会の中で有意なものとして行くか、言い換えれば、文化財を現代社会の中で如何に有効に活用して行くか、ということでありましょう。

そのためには、調査の成果は速やかに整理され、公開されなければなりません。その点で、文化財調査事務所の果す役割は重要であると考えます。文化財を有効に活用して行くための、最も基礎的な作業こそが、文化財調査事務所に課せられた基本的役割であります。文化財調査事務所が開設されて約２年、どこまでその役割を果たすことができたか？　当年報は、その足跡を記そうとするものであります。

文化財調査事務所をより充実したものとするために、皆様の御指導と御協力をお願いするものであります。

平成11年３月10日

大阪府教育委員会
文化財保護課長　鹿　野　一　美

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会文化財調査事務所年報の第２冊である。
2．大阪府教育委員会文化財調査事務所は、埋蔵文化財発掘調査等、文化財保護課の実施する文化財調査を担当するため、大阪府教育委員会文化財保護課の分室として、平成９年４月１日に開設された。
3．本書の第２・３表には、平成９年度に大阪府教育委員会文化財保護課が実施した埋蔵文化財調査のすべてを掲載している。なお、同表中実施面積欄の単位は「㎡」である。
4．主要な調査については、概要報告を掲載した。各概要報告の表題に示す数字列並びに番号はそれぞれ以下の内容を示している。なお、概要報告表題の調査番号は、第２・３表の調査番号と一致する。

遺跡名（平成９年度調査番号）
（１）所在地
（２）調査面積
（３）現地調査実施期間
（４）調査の原因となった事業
（５）概要報告執筆者

5．概要報告の執筆は主として調査担当者があたった。それ以外の項目の執筆は、文化財調査事務所勤務の職員が分担して行った。各文責はそれぞれの文頭に記した。
6．巻末の貸出・掲載許可・閲覧等にかかる資料の一覧表は、文化財調整係及び資料係で作成した。
7．本書の編集は資料係が担当した。

目　　次

平成９年度における埋蔵文化財調査の概況 …… 1

発掘調査概要報告 …… 7
- 木の本遺跡（９７００１） …… 7
- 高柳遺跡（９７００２） …… 8
- 田井中遺跡（９７００３・２４・４０，９６０７４） …… 9
- 新家遺跡（９７００４） …… 11
- 上汐４丁目所在遺跡（９７００５） …… 12
- 陶器南遺跡（９７０１３・２２） …… 13
- 摩湯山古墳（９７０１４） …… 14
- 雁屋遺跡（９７０１５） …… 15
- 吉志部遺跡（９７０１６） …… 16
- 池上曽根遺跡（９７０１７） …… 17
- 堺環濠都市遺跡ＳＫＴ７２３（９７０２３） …… 18
- 余部遺跡その１（９７０２７） …… 19
- 余部遺跡その２（９７０２８） …… 20
- 安威遺跡（９７０３１） …… 21
- みかん山古墳群（９７０３２） …… 22
- 倉垣遺跡（９７０３３） …… 23
- 中神田遺跡（９７０３８） …… 24
- 三軒屋遺跡（９７０３９） …… 25
- 上之郷遺跡（９７０４５） …… 26
- 陶邑窯跡群ＫＭ26・42号窯（９７０４６） …… 27
- 三軒屋遺跡（９７０４７） …… 28
- 谷川遺跡（９７０４９） …… 29
- はざみ山遺跡（９７０５３） …… 30
- 男里遺跡（９７０５６） …… 31

資料紹介一門真市普賢寺跡出土の密教法具 …… 32

文化財調査事務所設立の沿革と建設の経過 …… 34

文化財調査事務所における資料の整理と収蔵 …… 37

普及啓発・広報事業 …… 39

資料の貸出・掲載・閲覧状況 …… 40

平成９年度における埋蔵文化財調査の概況

尾上　実

調査件数・面積と各種土木工事等の動向

平成９年度に大阪府教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査は65件を数え、その実調査面積は54,131㎡となる。この数字には試掘調査や立会調査などを含む。調査の大部分は大阪府の実施する公共事業に先立つもので、他にごく少数ではあるが農用地整備公団や大阪府土地開発公社の事業などに伴うものがある。事業別や地域別の調査件数と調査面積を、第１図と第１表に示した。

起因となった事業別の調査面積を比率で表わせば、府営住宅の建替工事に伴うものが30.1％と最も多い。木造住宅の更新は終了に向かいつつあるが、簡易耐火住宅の建て替えがこれから進むと見られる。新規立地の困難な中での、既存住宅の高層化に伴う調査は当分続くであろう。10件のうち、発掘調査が３件で他は今後の建て替え予定地の試掘調査であった。

農林関係の調査が28.6％とこれに次ぎ、豊能地域や泉北・泉南地域を中心に実施している。規模の比較的大きな圃場整備はほぼ終わりつつあるが、溜池の改修や、小さな単位での土地改良事業に伴う小規模な調査が多く、調査件数はむしろ増加しつつある。

道路関係は26.0％を占めるが、その比率は低下しつつある。建設省や道路公団などによる大規模な道路建設に関わる調査を（財）大阪府文化財調査研究センターに委ねていることを考慮に入れても、調査面積は年々減少しつつある。関西新空港の開港や国民体育大会の開催に関連する道路建設が一段落したことや、用地買収の困難さの他、財政状況も反映しているのであろう。道路関係でも、既存路線の拡幅による、歩道設置や交差点改良などに伴う小規模の調査の件数が増えつつある。個々の調査区における成果という点では、多くを期待できないこれら小規模調査での、調査の手法とその成果の活用が大きな課題である。

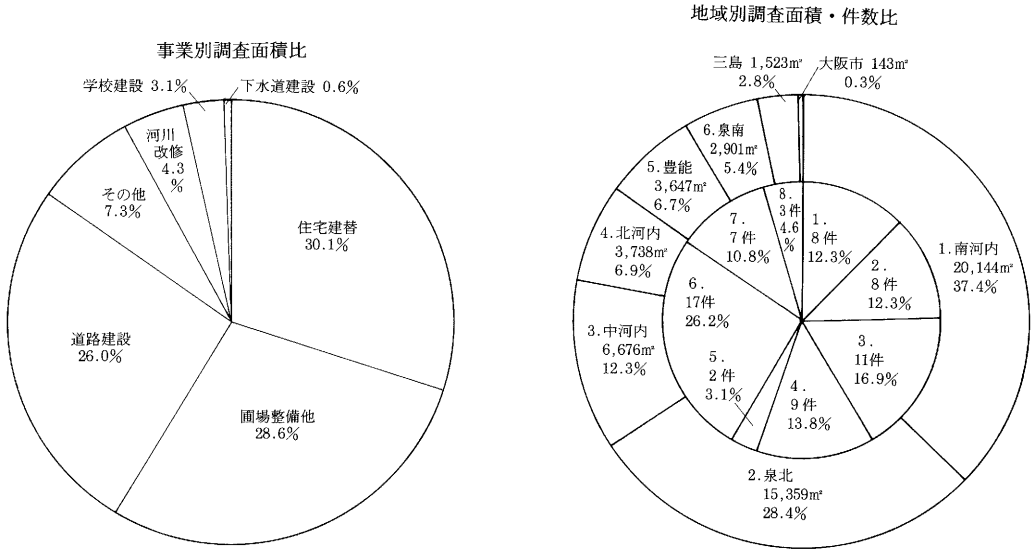
河川改良に伴う調査は、多くの場合、工事と並行して実施する必要があり、細長いトレンチ状のの調査を長期にわたって継続することが多い。平野川の改修に伴う調査などがその典型であり、長年にわたって継続した調査によって、遺跡の様子が分かりつつある。

下水道関連では本年度は管渠築造の竪孔に伴うものが大部分を占め、件数はかなりあるが、調査した面積はごくわずかである。

府立学校建設に伴う調査は減少しつつある。老朽化した校舎の更新が一段落していることもあろうが、生徒数の減少が背景にある。本年度は２校の校舎建て替えに伴う調査を実施した。

その他に含めたもののうち、府立公園の駐車場建設に伴う１件は3,600㎡を計るが、他は、警察署の改築や無線基地の築造、砂防工事などに伴う試掘調査や立会調査などである。

上述したように、これらの調査の大部分は大阪府の実施する事業を起因としたものであり、調査の経年的な推移を見ることによって、大阪における公共事業のあり方と文化財の関係、ひいてはそこに反映されている社会の変化をも窺うことが可



第１図　事業別・地域別面積比

能であろう。

各地域の主要な調査

【豊能地区】

圃場整備事業に伴う調査を長年にわたって継続しているが、本年度より倉垣遺跡の調査を開始した。飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物を始め、弥生時代の遺物や中世の建物群が検出されている。

吉志部遺跡の一画には瓦窯群が営まれ、平安京造営に伴う多量の瓦を供給したことが判明しているが、その西隣接地における試掘調査により、当該期の瓦などが出土し、瓦窯関連遺構がさらに広がると推定される。

【三島地区】

安威遺跡では堤を伴う溝によって画された古墳時代後期の集落を検出したが、竪穴住居は特異な構造を有するようである。

【北河内地区】

雁屋遺跡では火災を被ったと見られる弥生時代後期の住居跡や、後期後半の遺物を多量に含む溝などを調査した。

高柳遺跡は平安時代を中心に、各種の豊富な遺物を含む遺跡であるが、本年も建物群が検出され、井戸などからは墨書土器を始め施釉陶器などが出土している。

【中河内地区】

畿内でも最も古い農耕集落の一つと目される田井中遺跡では、前期前半の竪穴住居や溝、土坑などが確認され、河内平野における弥生文化の成立を考える上で重要な遺跡である。同様に狭長なトレンチの調査を続けている木の本遺跡では住居こそ確認されないが、庄内・布留式の土器を伴った遺構が多数検出されている。

みかん山古墳群では4基の古墳の調査を実施した。5世紀後半から6世紀後半にかけての群集墳であるが、墳形を歪ませたり、墓道を曲げてまで築造している様子は、狭い範囲に膨大な数の古墳が密集した、生駒山西麓を象徴するようである。

【南河内地域】

谷川遺跡で検出した溝は、現在の水利体系の上で重要な機能を持つ水路の前身と見られ、付近の開発を考える上で大きな意味を持つものであろう。

余部遺跡の（その1）調査区では、旧流路跡の谷状地形を利用して、堤を築いて木樋を埋めた溜池と併せて、これに伴う祭祀遺構や建物群が検出された。13世紀代における、台地部分の開発の跡をよく示す遺構群である。

同遺跡の（その2）調査区では、鋳造関連遺構群が発見された。多数の炉跡や鋳型据付け跡と見られる焼土坑などが、鋳型片や鉱滓を伴って検出された。大半が建物内に築かれており、工房内で作業が進められたと判断できる。また、溝で囲まれた方形区画の建物群も検出しており、工人たちを掌握していた者の屋敷地であろう。中世の河内鋳物師の本拠地における、生産と居住の場をともに明らかにすることができた。

		豊　能	三　島	北河内	中河内	南河内	泉　北	泉　南	大阪市	合　計
道路建設	件　数	1	2	2	1	2	1	6	0	15
	面積（㎡）	647	1,492	1,924	700	3,920	5,000	391	0	14,074
学校建設	件　数	0	0	1	0	1	0	0	0	2
	面積（㎡）	0	0	1,500	0	180	0	0	0	1,680
圃場整備等	件　数	1	0	0	0	0	4	5	0	10
	面積（㎡）	3,000	0	0	0	0	10,143	2,339	0	15,482
住宅建設	件　数	0	2	2	0	2	2	1	1	10
	面積（㎡）	0	6	47	0	16,000	206	30	15	16,304
河川改修	件　数	0	0	3	4	1	0	1	0	9
	面積（㎡）	0	0	207	2,120	15	0	9	0	2,351
下水道建設等	件　数	0	3		4	1	0	2	0	10
	面積（㎡）	0	25		180	19	0	70	0	294
その他	件　数	0	0	1	2	1	1	2	2	9
	面積（㎡）	0	0	60	3,676	10	10	62	128	3,946
合　計	件　数	2	7	9	11	8	8	17	3	65
	面積（㎡）	3,647	1,523	3,738	6,676	20,144	15,359	2,901	143	54,131

第1表　平成9年度調査件数・調査面積

【泉北地域】

弥生時代の泉州でも最大の拠点的集落である池上曽根遺跡では、環濠の外側、遺跡の東北部の調査を実施した。今まで知られていなかった中期の墳墓域が発見され、慎重な調査の結果、方形周溝墓の盛り土と、そこに掘り込まれた複数の木棺の痕跡を確認した。

陶邑窯跡群内では、2基の須恵器窯の調査を実施した。ともに窯体は失われていたが、古墳時代後期の所産である。同窯跡群内の一画に位置する陶器南遺跡の古墳時代後期建物群には、焼け歪んだ焼成失敗の土器などが多量に出土し、須恵器工人たちの集落であることが推定できるが、奈良時代の建物群には、特に須恵器生産との関わりを示すものはない。

堺環濠都市遺跡では、16世紀後半から17世紀前半の道路や蔵、埋め甕、礎石建物などを検出し、近世初頭の都市堺の様相を示す。

【泉南地域】

農用地整備公団の事業に伴う三軒屋遺跡の調査では、弥生時代後期の竪穴住居が検出され、また、同遺跡のかんがい排水事業に伴う調査では、6世紀後半の横穴式石室が発見された。低地にも関わらず、付近では現水田下にいくつかの古墳が発見されており、後期の古墳群としては特異な立地を示している。

泉南を代表する前方後円墳の摩湯山古墳では、その周堤の一部の調査を実施し、堤部の構造の一部を明らかにすることができた。

【遺物整理事業】

文化財調査事務所では発掘調査などと並行して、過年度に実施した発掘調査によって出土した遺物の整理事業も実施している。本年度に実施した主な事業を記す

・高校遺物整理

府立高校の建設や建て替えに伴い調査した、雁屋遺跡や堺環濠都市遺跡などより出土した遺物の整理事業。

・土師の里遺跡他遺物整理事業

府営住宅の建て替え事業に伴い実施した、土師の里遺跡、盾塚古墳の出土遺物整理事業。

・大和川今池遺跡遺物整理事業

下水道処理場建設に伴い実施した、大和川今池遺跡の調査により出土した遺物の整理事業。

調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始	調査終了	実施面積(㎡)	担当者	事業名
97001	木の本遺跡	八尾市木の本2丁目、3丁目	発掘	H9.5.12	H10.3.25	1,300.00	岩瀬 透	平野川改修
97002	高柳遺跡	寝屋川市高柳2丁目	発掘	H9.10.23	H10.3.25	1,900.00	杉本 清美	都市計画道路千里丘寝屋川線建設
97003	田井中遺跡	八尾市空港1丁目地内	発掘	H9.7.1	H9.8.29	240.00	亀島 重則	平野川改修
97004	新家遺跡	東大阪市荒本西1丁目	発掘	H9.4.1	H9.5.20	75.00	阿部 幸一	府道中央環状線荒本跨道橋改良
97005	上汐4丁目所在遺跡(新規発見)	大阪市天王寺区上汐4－4－32	試掘	H9.4.23	H9.4.24	12.00	竹原 伸次	府立夕陽ヶ丘女子高等職業技術専門校建替
97006	遺跡外	岬町深日3275-1番地他	試掘	H9.5.12	H9.5.16	38.00	上林 史郎	岬町南村住宅地開発事業分布調査1997/2/27及び/3/4
97007	竹之内街道他	羽曳野市駒ヶ谷	試掘	H9.5.13	H9.5.13	15.00	枡本 哲	飛鳥川改修
97008	郡遺跡	茨木市郡	発掘	H9.5.6	H9.5.7	3.00	山上 弘	茨木箕面幹線(二)下水道管
97009	中河原遺跡	茨木市上郡	発掘	H9.5.13	H9.5.20	12.00	山上 弘	茨木箕面幹線(二)下水道管
97010	北条西遺跡	大東市北条	立会	H9.5.7	H9.5.7	10.00	今村 道雄	谷田川改修
97011	久宝寺遺跡	八尾市久宝寺	立会	H9.5.20	H9.5.20	76.00	今村 道雄	修景広場便所新築
97012	番川下流遺跡	岬町淡輪	発掘	H9.5.26	H9.5.27	23.75	上林 史郎	南大阪湾岸流域下水道、岬阪南幹線下水管築造
97013	陶器南遺跡	堺市陶器北	発掘	H9.4.1	H9.4.23	205.00	山田 隆一	陶器北地区府営圃場整備
97014	摩湯山古墳	岸和田市摩湯町	試掘	H9.7.9	H9.7.14	9.00	上林 史郎	一般府道三林・岡山線歩道設置
			発掘	H9.8.17	H9.9.10	250.00		
97015	雁屋遺跡	四条畷市雁屋北町	発掘	H9.8.10	H10.9.30	1,480.00	阿部 幸一	府立四条畷高等学校校舎建替
97016	吉志部遺跡	吹田市岸部北4丁目	試掘	H9.8.20	H9.8.28	92.00	山上 弘	都市計画道路豊中岸部線建設
97017	池上曽根遺跡	和泉市池上町	発掘	H9.8.17	H10.3.31	5,000.00	藤沢 真依 井西 貴子	府道池上下宮線建設
97018	玉櫛遺跡隣接地	茨木市玉櫛1丁目	試掘	H9.9.8	H9.9.11	4.00	今村 道雄	府営玉櫛住宅建替
97019	番川下流遺跡	岬町淡輪	試掘	H9.8.21	H9.8.31	50.00	小浜 成	南大阪湾岸流域下水道、岬阪南幹線下水管築造
97020	三軒屋遺跡	泉佐野市長滝	発掘	H9.8.19	H9.8.22	44.00	枡本 哲	一般府道日根野羽倉崎線歩道設置
97021	尾平遺跡隣接地	富田林市東板持	試掘	H9.8.25	H9.9.5	200.00	林 日佐子	国道309号富田林バイパス
97022	陶器南遺跡	堺市陶器北	発掘	H9.9.16	H10.2.27	9,147.00	竹原 伸次	陶器北地区府営圃場整備
97023	堺環濠都市遺跡	堺市寺地町西2丁33	発掘	H9.9.19	H9.10.9	196.00	竹原 伸次	府営寺地町住宅建替
97024	田井中遺跡	八尾市田井中4丁目地内	発掘	H9.9.1	H9.12.2	340.00	亀島 重則	平野川改修
97025	大園遺跡隣接地	高石市綾園	試掘	H9.9.16	H9.9.16	10.30	上林 史郎	府営高石住宅建替
97026	田治米宮内遺跡	岸和田市田治米町	試掘	H9.9.25	H9.9.25	3.00	上林 史郎	府道三林岡山線歩道設置
97027	余部遺跡(その1)	美原町南余部	発掘	H9.8.26	H10.3.31	8,500.00	枡本 哲 森屋 直樹	府営美原南余部住宅建替
97028	余部遺跡(その2)	美原町北余部	発掘	H9.9.25	H10.3.31	7,500.00	林 日佐子 小浜 成	府営美原北住宅建替
97029	古川遺跡	門真市御堂町	試掘	H9.9.29	H9.9.30	2.00	今村 道雄	府営古川橋住宅建替
97030	玉櫛遺跡	茨木市玉櫛2丁目	試掘	H9.10.2	H9.10.2	2.00	今村 道雄	府営玉櫛住宅建替

第２表　平成９年度調査箇所一覧（１）

調査番号	遺跡名	所在地	種別	調査開始	調査終了	実施面積(㎡)	担当者	事業名
97031	安威遺跡	茨木市南安威	発掘	H9.9.29	H10.3.31	1,400.00	酒井 泰子	主要地方道茨木亀岡線改良
97032	みかん山古墳群	東大阪市東豊浦町	発掘	H9.8.18	H10.2.29	3,600.00	奥 和之	府立枚岡公園駐車場建設
97033	倉垣遺跡	能勢町倉垣	発掘	H9.8.21	H10.2.27	3,000.00	辻本 武	歌垣地区府営農村総合整備
97034	陶邑窯跡群	堺市桧尾	試掘	H9.10.17	H9.10.17	10.00	上林 史郎	土地開発公社代替地
97035	二ツ池遺跡	貝塚市清児	試掘	H9.10.20	H9.10.24	39.00	上林 史郎	府営ため池等整備事業
97036	禁野本町遺跡	枚方市中宮北町	試掘	H9.10.23	H9.10.27	24.00	今村 道雄	府道杉田口禁野線歩道設置
97037	広瀬遺跡隣接地	島本町水無瀬1丁目	試掘	H9.11.4	H9.11.4	10.00	山上 弘	淀川右岸流域下水道高槻島本雨水幹線(第4工区)下水管渠築造工事
97038	中神田遺跡	寝屋川市御幸西町	発掘	H9.7.11	H9.11.24	132.00	今村 道雄	御幸西調節池流入管渠立坑築造
97039	三軒屋遺跡	泉佐野市長滝地内	発掘	H9.11.1	H9.12.25	500.00	上林 史郎	府営かんがい排水事業樫井川地区(パイプライン)
97040	田井中遺跡	八尾市田井中4丁目地内	発掘	H9.11.19	H10.1.14	240.00	亀島 重則	平野川改修
97041	熊野街道	泉佐野市中樫井	発掘	H9.12.4	H10.2.4	140.00	上林 史郎	府道和歌山貝塚線歩道設置
97042	長谷遺跡	四条畷市清滝	試掘	H10.1.5	H10.1.19	60.00	今村 道雄	防火行政無線基地建設(清滝中継所)
97043	遺跡外	大阪市都島区都島北通	試掘	H9.12.15	H9.12.15	8.00	芝野 圭之助	都島警察署改築
97044	禅城寺遺跡	池田市城南2丁目	発掘	H10.1.19	H10.3.25	647.00	山上 弘	都市計画道路神田池田線拡幅
97045	上之郷遺跡	泉佐野市上之郷地内	発掘	H10.1.5	H10.2.28	500.00	上林 史郎	府営水質保全事業泉佐野地区(パイプライン)
97046	陶邑窯跡群	堺市城山台5丁地内	発掘	H10.1.7	H10.3.31	753.00	山田 隆一	光明池地区府営ため池等整備
97047	三軒屋遺跡	泉佐野市上之郷地内	発掘	H9.12.26	H10.3.20	600.00	森屋 直樹	農用地整備事業下村地区
97048	神於寺跡	岸和田市上白原地内	試掘	H10.2.4	H10.2.4	9.00	芝野 圭之助	龍王院地区急傾斜地崩壊対策事業
97049	谷川遺跡	富田林市谷川町	発掘	H10.2.16	H10.3.30	180.00	井西 貴子	府立富田林高等学校建替
97050	海会寺跡	泉南市信達大苗代	試掘	H10.2.19	H10.2.19	10.00	上林 史郎	府道和歌山貝塚線歩道設置
97051	枚方上之町遺跡他	枚方市枚方上之町 他	試掘	H10.2.23	H10.3.6	45.00	今村 道雄	府営枚方西住宅他建替
97052	尾平遺跡	富田林市東板持町	発掘	H10.3.1	H10.3.31	3,726.00	今村 道雄	国道309号線改良
97053	はさみ山遺跡	藤井寺市野中3丁目	発掘	H10.3.4	H10.3.9	18.90	芝野 圭之助 竹原 伸次	御陵西幹線下水道管渠築造
97054	遺跡外	岸和田市磯ノ上1丁目地内	試掘	H10.3.16	H10.3.17	30.00	上林 史郎	府営磯ノ上住宅建替
97055	遺跡外	住吉区墨江	試掘	H10.3.19	H10.3.19	15.00	上林 史郎	府営墨江住宅建替
97056	男里遺跡	泉南市男里地内	発掘	H9.12.10	H10.2.15	600.00	上林 史郎	府営地域総合オアシス整備事業・泉南地区双子池改修
97057	中神田遺跡	寝屋川市御幸西町	試掘	H9.7.11	H9.7.22	65.00	今村 道雄	御幸西流域調節池築造
97058	金岡遺跡	堺市金岡町	試掘	H9.10.24	H9.12.26	38.00	山田 隆一	府営地域総合オアシス整備事業・金岡地区森池改修
97059	壷井八幡宮	羽曳野市壷井	立会	H10.3.23	H10.3.23	10.00	枡本 哲	急傾斜崩壊対策壷井地区
97060	土生遺跡隣接地	岸和田市土生	立会	H9.11.18	H9.11.18	4.00	森屋 直樹	主要地方道岸和田港塔原線歩道設置
97061	上之郷遺跡	泉佐野市上之郷	試掘	H9.8.1	H9.8.1	24.00	枡本 哲	上之郷交番建替

第３表　平成９年度調査箇所一覧（２）

第２図　発掘調査概要報告掲載遺跡位置図

発掘調査概要報告

木の本遺跡（９７００１）

（１）八尾市木の本２丁目、３丁目　　（２）1300㎡
（３）平成９年５月12日～平成10年３月25日
（４）平野川改修　　（５）岩瀬　透

木の本遺跡は現大和川右岸、八尾市の西南部にあり、西側を大阪市平野区に接している。主として弥生時代～中世にかけての遺構・遺物を出土する遺跡である。この発掘調査は一級河川平野川改修事業に伴なうもので、平成９年度は了意橋下流部分の延長100ｍ、木の本橋下流部分の40ｍを中心に実施した。

了意橋下流地区

上層は平野川による土砂の堆積が厚くみられ、内部から陶磁器・瓦質土器・土師器などが大量に出土した。現平野川に関わる護岸改修の痕跡も認められ、近世以降少なくとも２回の護岸工事が行われたことが判明した。それ以前には、流路は蛇行しつつ氾濫を繰り返していたようで、複数の面で流路が検出された。

集落に伴うと考えられる遺構が検出されるのは、古墳時代前期にまで遡らねばならない。遺構が検出されたのは最も上流側にあたる南端部で、溝・土坑・井戸などを多数検出した。これらの遺構からは、庄内式土器、布留式土器などがまとまって出土しており、古墳時代前期から中期初頭にかけての、比較的長期間にわたって集落が形成されていたことが判明した。今回検出したのは集落の北端部にあたる部分で、集落の中心は南西方向にあるものと思われる。また、調査地の北半部には生産域が広がっていたことが、花粉分析の結果判明している。

木の本橋下流地区

主たる遺構面を２面検出した。上面は古墳時代中期を中心とする遺構面で、土坑などが検出されており、５世紀後半の須恵器などを含んでいる。しかし遺構分布は散漫であるので、この時期については集落の縁辺部にあたる可能性が強い。

下面は基本的には古墳時代前期を中心とする遺構群と考えられる。溝や不定形土坑、柱穴、井戸状遺構を検出した。溝は深さ20㎝、幅数10㎝の東西方向のものが多い。2.5ｍ乃至５ｍの幅の狭いトレンチでもあり、住居跡は確認できなかった。遺物は包含層から出土する以外は、井戸状遺構から一度に投棄されたような状態で出土することが多い。遺構の時期は、庄内式が主体になるものと、布留式が主体になるものがある。

木の本橋上流地区

ここでも遺構面が２面確認されている。上面は溝や落ち込みなどで、古墳時代中期を主体とする。下面は溝、柱穴、土坑などが検出され、遺物は古墳時代前期～中期のものが混在している。

調査区毎に遺構の所属する時期が多少異なる。当調査区内には複数の集落が存在するか、時期によってすこしずつ移動している可能性がある。

第３図　古墳時代遺物出土状況１

第４図　古墳時代遺物出土状況２

高柳（たかやなぎ）遺跡（９７００２）

（１）寝屋川市高柳２丁目　　（２）1900㎡
（３）平成９年10月23日～平成10年３月25日
（４）都市計画道路千里丘寝屋川線建設　　（５）杉本 清美

寝屋川市高柳２丁目に所在する高柳遺跡は、寝屋川市の西部に位置し、淀川と古川などの分流が形成した標高３ｍの三角州・自然堤防上に立地している。

調査は、平成８年度より実施している都市計画道路千里丘寝屋川線建設に伴うもので、平成９年10月から平成10年３月にかけて、約1900㎡の調査を実施した。これまでの調査（Ａ区～Ｃ区）で、鎌倉時代の耕作跡、平安時代の掘立柱建物跡や弥生時代後期の竪穴住居跡が見つかっている。

今回の調査（Ｄ区）では、平安時代の掘立柱建物や柵列、井戸、溝、数多くの鋤溝を検出した。鎌倉時代の鋤溝、溝、さらに江戸時代頃の粘土取り跡なども見られた。

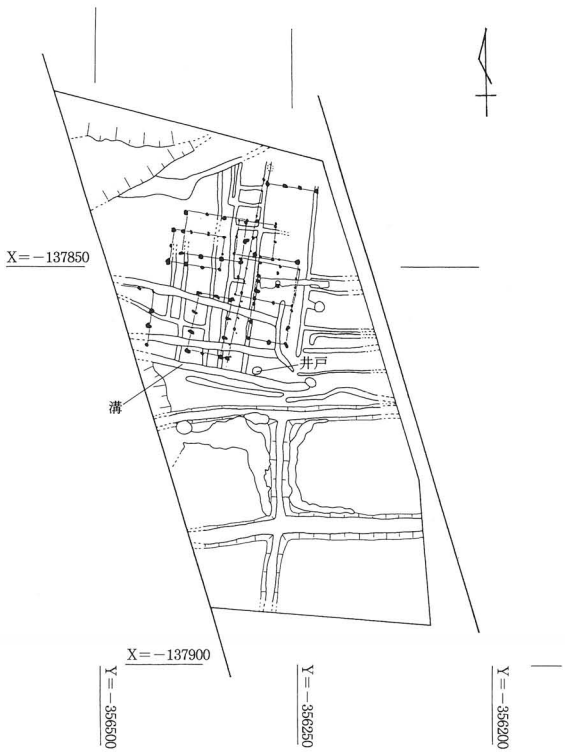
調査区の中央部より北側で、掘立柱建物９棟、井戸５基、柵列などを検出した。掘立柱建物は、おおむね２間×３～４間である。建物の柱穴は、１辺約30㎝の方形で、深さ30～50㎝を測る。柱穴内には、直径約20～30㎝の柱根が残っているものや、柱を抜き取った痕跡の顕著なものもある。また、柱穴内に、炭やススが多く含まれていることから、火災に遭った後、残った柱を抜き、整地したものと思われる。建物群と南側の耕作地を分ける溝にもスス、炭化物が含まれていた。

建物に隣接して井戸を５基検出した。調査区の中央部に位置する井戸は、径約１ｍの円形、深さ約１ｍを測る。底付近では曲げ物が２段重なっていた。曲げ物内から、土師器坏・皿、黒色土器坏、須恵器小壺などを検出した。また、土師器坏の底部に「井」の文字を記した墨書土器も見られた。10世紀前半に相当する。

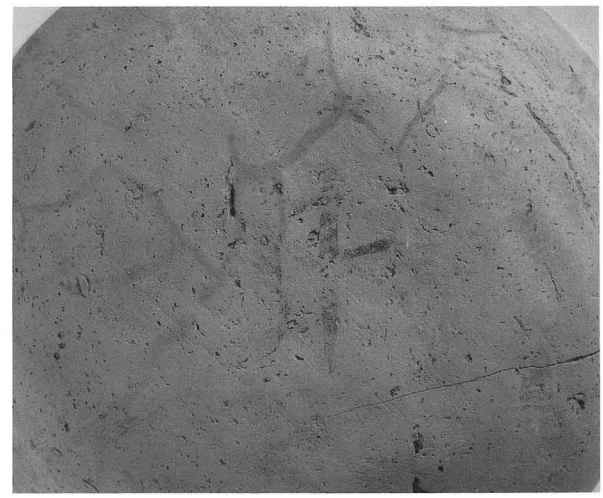
調査区中央部で、東西方向に伸びる区画溝を検出した。幅約50～60㎝、深さ約50㎝を測り、逆三角形を呈す。この溝を境に、南側には水田の畦畔が見られることから、これまでの調査で確認されてきた平安時代集落域の南限の区画溝になると思われる。

その他の遺物として、緑釉陶器、青白磁片なども見られた。

調査のまとめとして、高柳遺跡における平安時代の集落域の広がりと、南限を示す区画溝の存在を確認することができた。また、平安時代の建物群は地方豪族の居宅もしくは地方官衙に関連すると考えられることから、高柳遺跡と周辺にある茨田郡衙等との関わりを考えるうえで貴重な資料になると思われる。



第５図　平安時代遺構検出状況図



第６図　墨書土器

田井中（たいなか）遺跡（９７００３・２４・４０、９６０７４）

（１）八尾市田井中４丁目地内、空港１丁目地内　　（２）1160㎡
（３）平成９年１月８日～平成10年１月14日
（４）平野川改修　　（５）亀島 重則

遺跡は、大阪平野の南東部、旧大和川水系の流域に形成された河内低地に立地する。八尾空港の北東にひろがる。調査は、1975年、最初に発見された陸上自衛隊構内の地域、その北にある住宅地（現在は志紀遺跡に名称変更）、そして自衛隊敷地の西にあたる水路（八尾空港北濠）・平野川を中心に行なわれてきた。

大阪府教育委員会が実施している北濠・平野川地区では、弥生時代前期の環濠集落や突帯文主体の居住区、そして前期から後期以降に続く集落が発見されている。他に古墳時代前期から中期の居住区の一部や奈良時代以降連続する条里型地割に沿った水田や畑がある。

弥生時代前期（古・中段階）（第９図）

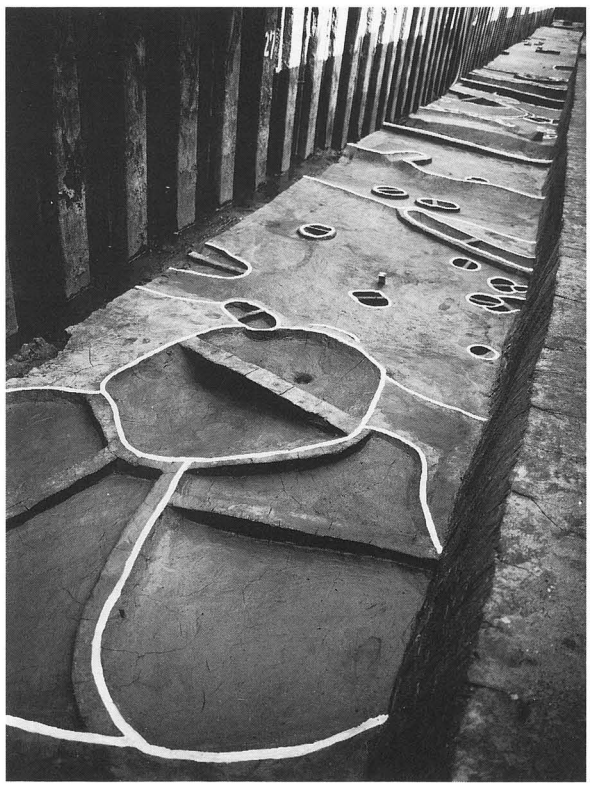
突帯文土器を主体とする土坑・溝・小穴が第５調査区で検出された。北濠地区で検出された居住区の続きになる。また、第４調査区でも土坑・小穴群が検出された。北東に広がるとみられ、居住区を構成する可能性がある。第４調査区で、集落（遠賀川系土器主体）の東部環濠を中心とする地域を調査した。竪穴住居・溝・土坑・落ち込み・小穴などがある。2条の環濠のうち、外側は掘り直しがあり、新しい方は人為的に埋めたとみられ、既掘の所見を裏付けた。東部の浅い谷には数条の溝が認められ、北濠地区の溝に接続する。他に同時期の水田の可能性が高い畦畔や新段階の土坑も検出されている。さらに中期に下る大溝も検出されている。

古墳時代前期～中期

第４調査区では、西端部と東部に大溝が検出された。この両大溝間および東部溝の東、浅い谷を隔てた地域に畦畔が広がる。水田を形成するものとみられる（庄内式期）。さらにこの後も東部域を中心に畦畔がみられる（布留式期）。第５調査区では、溝・土坑・小穴が検出されている。西側に接する調査区で検出された土坑・溝などとともに居住区の一角を占める。

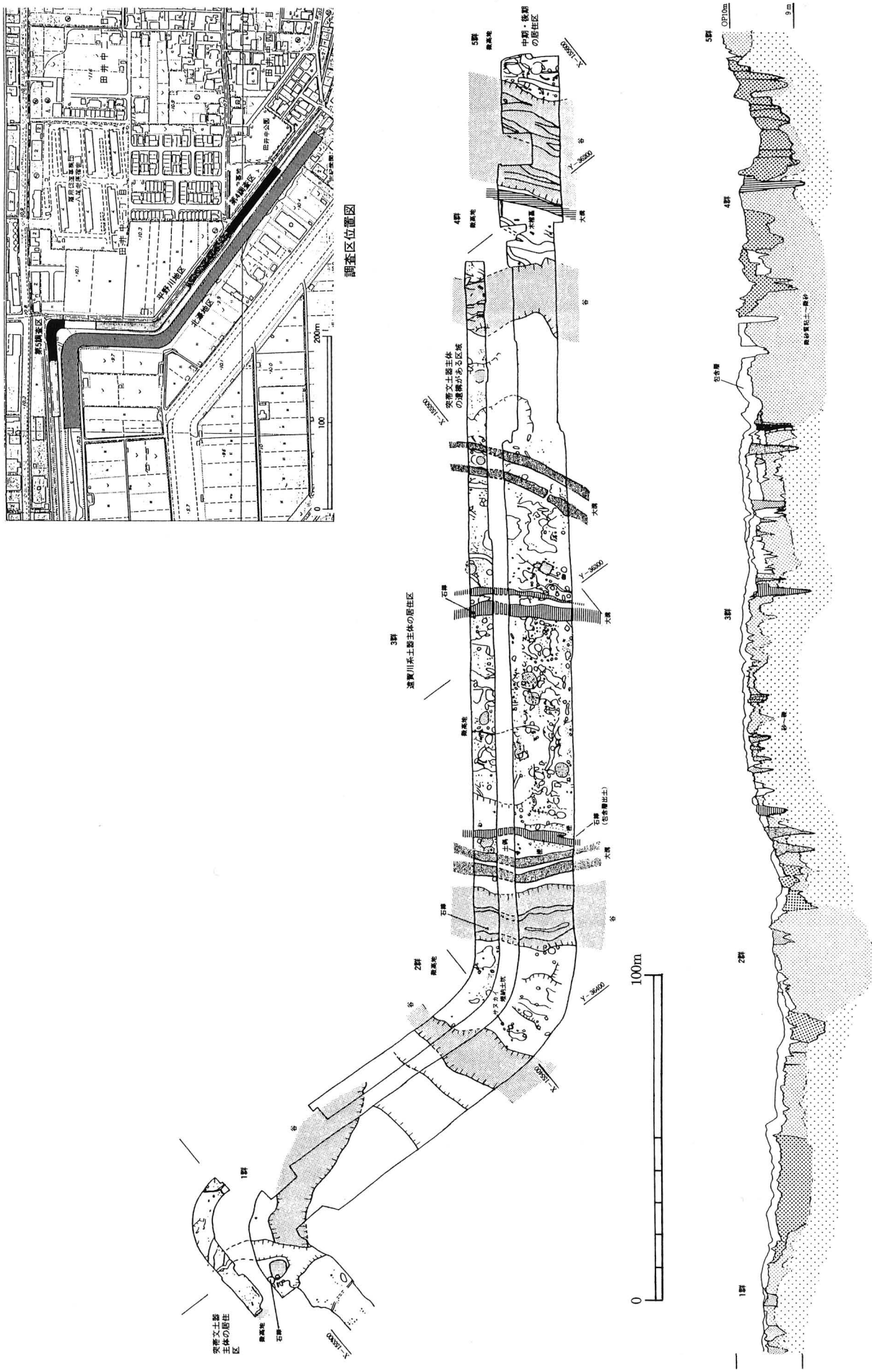
奈良時代～平安時代後期

水田遺構として、条里型地割の方向に沿った大溝・大畦畔・段、他に溝・土坑・落ち込み・足跡などが検出された。第４調査区西端では、平安期の坪境交差点を検出した。



第７図　弥生時代遺構（第４調査区）

第８図　古墳時代遺構（第５調査区）



第９図　弥生時代の田井中遺跡全体図

新家（しんげ）遺跡（９７００４）

（１）東大阪市荒本西１丁目　　（２）75㎡
（３）平成９年４月１日～５月20日
（４）府道中央環状線荒本跨道橋改良　　（５）阿部 幸一

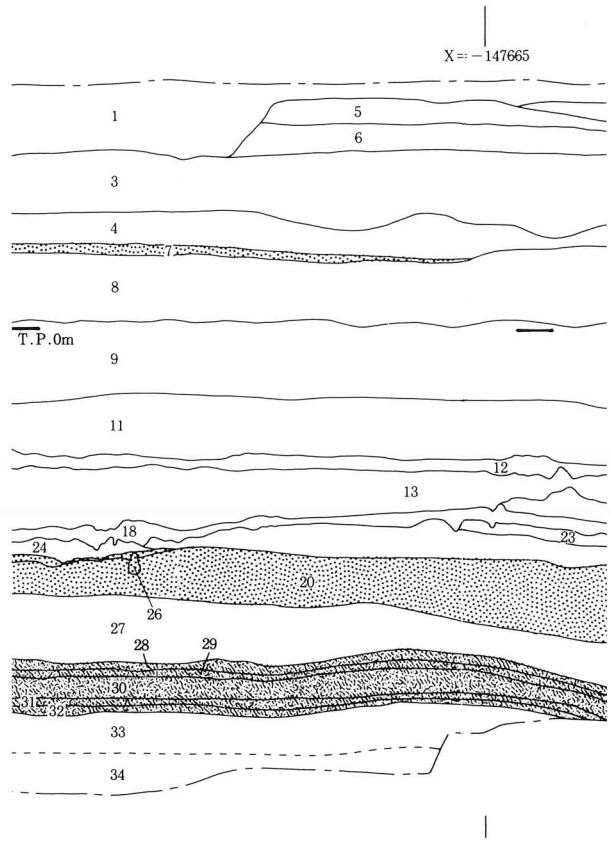
遺跡は、大阪の中央部に広がっていた河内潟に旧大和川水系が形成した三角州上に所在する遺跡群中で、もっとも汀線近くに立地すると認識されている。これまで近畿自動車道や阪神高速道路のジャンクション建設に伴い６回の発掘調査が実施されている。その調査で、弥生時代後期頃の木製品や古墳時代中期の土器、土嚢として利用されていた中世の土俵列などが出土している。

工事は荒本跨道橋南行車線の側道からの流入路を延長する工事で、調査地の大きさは南北30m、東西2.5mである。

調査地は周知の遺跡範囲南端で、古墳時代前期の西岩田遺跡や意岐部遺跡などに隣接している。

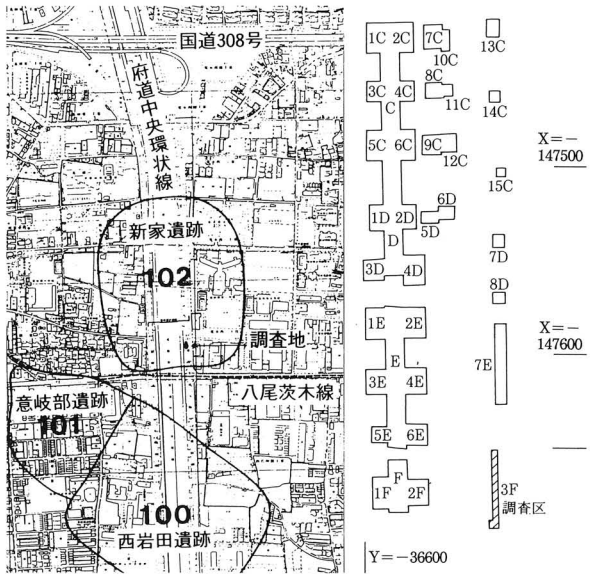
これまでの調査で、調査地付近は近世まで葦等の親水性植物が繁茂する地域とされていた。今回の調査でも、粘土と砂、シルトの連続した堆積層で、遺構、遺物ともに検出できなかった。

断面図中の、スクリーントーンで示した上の２層はシルト、砂層、下の層は親水性植物を多量に含む泥質層である。



土　層　名
1 旧耕土・撹乱土　3 淡黄色粗砂層　4 灰色砂層　5 暗赤褐色砂層　6 にぶい赤褐色砂層　7 緑灰色シルト
8 緑灰色粘土　9 明青灰色粘質シルト　11 青灰色粘土　12 灰色粘土　13 青灰色年　18 青灰色粘土
20 灰色粗砂～微砂　23 灰色粘土　24 青灰色シルト混粘土　26 灰色粘土　27 灰色粘土　28 灰オリーブ色粘土
29 灰色粘土　30 褐灰色粘土　31 灰色粘土　32 灰色粘土　33 暗灰黄色粘土　34 灰色粘土

第11図　土層断面図（上下1/40、左右1/100）



第10図　調査地位置図

第12図　土層断面

上汐（うえしお）４丁目所在遺跡（９７００５）

（１）大阪市天王寺区上汐４丁目　　（２）12㎡
（３）平成９年４月23日～４月24日
（４）府立夕陽丘女子高等職業技術専門校建替　　（５）竹原 伸次

調査地は、大阪市の中央部を南北に延びる上町台地のほぼ中央部に位置し、稜線上に立地する。

これまで周知の埋蔵文化財包蔵地としては認識されていなかったが、調査地の西側を熊野街道が南北に通り、また周辺に上之宮遺跡等の遺跡があることから、試掘調査を実施したものである。

試掘坑１

谷町筋側に設定した。層序は、現建物のコンクリート、第２次大戦の焼土整地層約20㎝、この層以下、炭化物を含む暗灰色、黒褐色砂質土、粘質土が約１m堆積する。地山は黄褐色砂質土である。

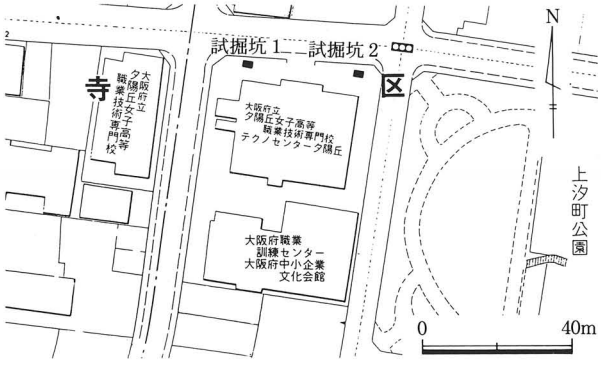
この暗灰色、黒褐色砂質土、粘質土は、湿地に堆積したと思われる層である。これらの層からは近世の遺物が出土した。地山上から、上層の湿地状堆積層を埋土とする溝を検出した。

試掘坑２

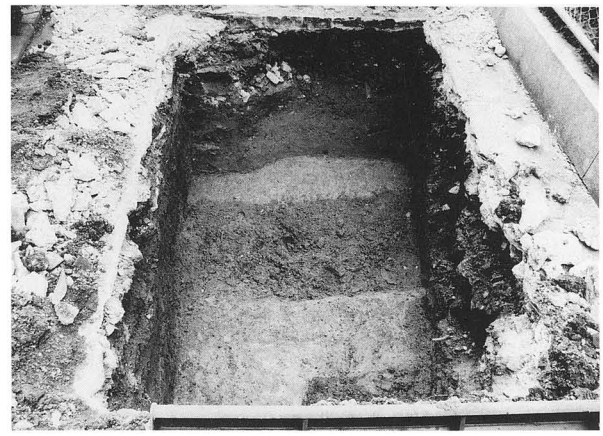
熊野街道側の調査区である。層序は、現建物のコンクリート床以下、灰黄色砂質土が約20㎝、黄灰色砂質土、灰色砂質土が約40㎝堆積する。地山は黄褐色粘質土である。黄灰色砂質土、灰色砂質土からは須恵器、土師器、瓦器が出土し、近世以降の遺物がないことから、中世の遺物包含層と考えられる。地山上から、柱穴、東西方向の溝を検出した。遺構内からは、中世の瓦器、土師器が出土した。

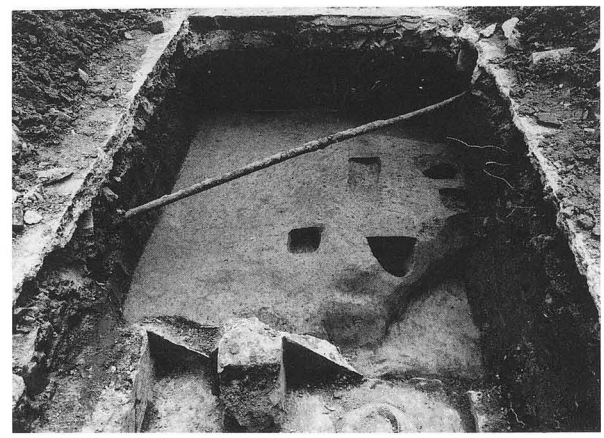
調査の結果、中世の包含層、遺構を発見したことから、文化財保護法第57条の６に基づく遺跡の発見通知を提出させ、遺跡名は上汐４丁目所在遺跡とした。

第13図　調査地位置図（192 熊野街道）



第14図　調査区位置図


第15図　試掘坑１


第16図　試掘坑２

陶器南遺跡（９７０１３・２２）

（１）堺市陶器北　　（２）9352㎡
（３）平成９年４月１日～４月23日、９月16日～平成10年２月27日
（４）陶器北地区府営圃場整備　　（５）竹原 伸次・山田 隆一

陶器南遺跡は、堺市の南部にあり、日本最大の須恵器生産地である陶邑窯跡群と、谷をはさんでそのすぐ北側に位置する。南東から北西に伸びる舌状の丘陵の先端部に立地している。

本遺跡の調査は、平成６年から継続して実施しているが、その原因が府営圃場整備事業ということもあり、耕地整備、水路等によって遺構面が削平される区域のみ調査してきた。

ところが、平成７年度に調査を実施した圃場整備区域が、実際には工事着手時に既調査範囲以上に遺構面を削平しようとしていることが判明した。

このため、平成９年度の調査は、まず緊急を要する水路部分について、追加１区、２区として調査を実施した（97013）。その後、１区から５区の約7,850㎡と、平成９年度事業として調査を予定していた区域約1,300㎡（６区から９区）の調査を順次実施した（97022）。

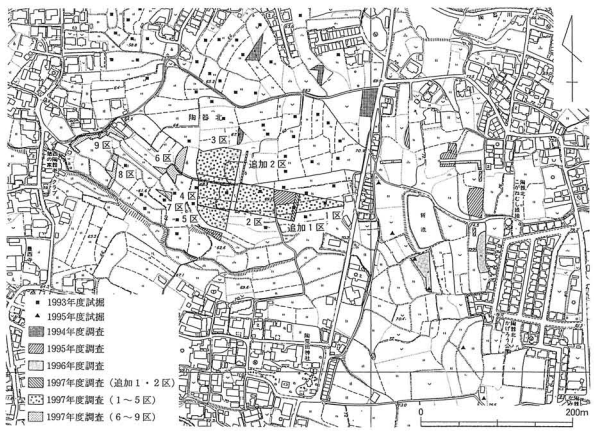
調査の結果、１区、２区から20数棟に及ぶ古墳時代後期、奈良時代の掘立柱建物跡、溝、土坑を検出することができた。特に奈良時代の掘立柱建物跡は、溝によって区画されている。

３区から５区は、遺構の残存状態は良くなかったが、古墳時代後期の柱穴、溝を検出した。

６区、７区からは、古墳時代後期の掘立柱建物跡、土坑、溝を検出した。

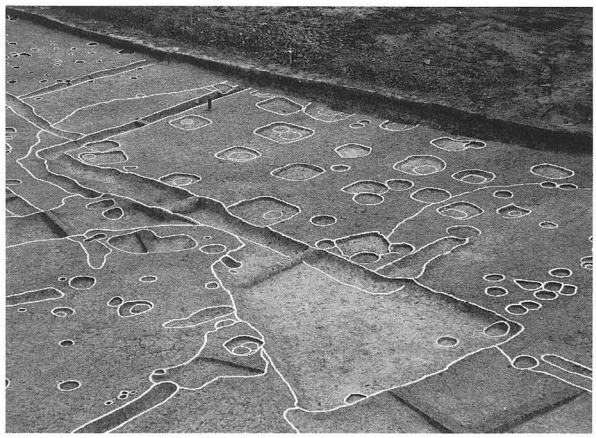
８区からは、古墳時代後期の柱穴を検出するとともに、調査区最下段から最終的に中世に埋没した谷を検出した。９区からは、古墳時代後期の掘立柱建物跡、柱穴を検出した。

今回の調査は、図らずも大面積の調査となったことによって、陶器南遺跡の実態の一部を明らかにすることができた。しかしながら、文化財の保護という観点からみれば、反省点が多く残る調査であった。



第17図　調査区位置図

第19図　掘立柱建物跡・土坑・溝（６区）


第18図　溝で区画された掘立柱建物跡（１区）

第20図　溝内遺物出土状況（３区）

摩湯山古墳（９７０１４）

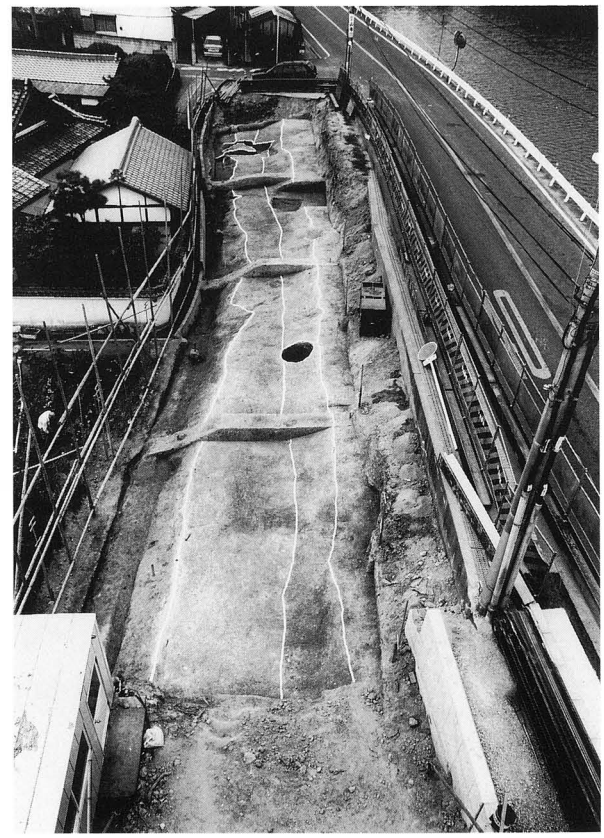
（１）岸和田市摩湯町　　（２）250㎡
（３）平成９年８月17日～９月10日
（４）一般府道三林岡山線歩道設置　　（５）上林 史郎

摩湯山古墳は、岸和田市の北部、和泉市との境界付近に立地する全長約200ｍの大型前方後円墳である。本古墳は、昭和31年に国史跡として指定された後は、墳丘及び周濠は現在まで保存されてきた。ただ、本古墳の西から北へ抜ける府道三林岡山線は、南側に位置する府道岸和田牛滝山貝塚線から泉北ニュータウン方面に通じる泉州山手線へのバイパスとして、近年交通量も多く、また、古墳周辺は地元城東小学校の通学路にもなっていることなどから、本府道の拡幅が地元では切望されていた。今回、新たに摩湯山古墳の周堤部にあたる府道を拡幅し、新しい歩道やバス停留所を設置することが大阪府土木部道路課によって計画された。それに伴い、試掘調査を実施したところ、上部を削平された堤本体の北斜面部分を検出した。そのため、長さ約40m、幅約６ｍの調査区を設定して本調査を進めることになった。

発掘調査の結果、摩湯山古墳の周堤の一部や近世の井戸及び水路などが検出された。摩湯山古墳の前方部側の周堤は、現在の府道三林岡山線と重なっているものと考えられ、堤本体の盛土や埴輪列などは検出されなかった。ただ、赤褐色土の地山を削りだした堤の北斜面の一部を検出することができた。検出された堤の規模は、長さ約38m、斜面幅1～1.5m、高さ約0.6mをはかる。堤外面のテラス部分の幅は、北東側に堤と平行する近世水路があるため、幅1.2m～4.1mしか遺存していない。また、堤斜面の検出面の高さは標高19.5m前後と考えれば、約２ｍのレベル差が生じる。すなわち、調査区付近では、道路擁壁や以前建っていた家の基礎堀方等によって約2mが削平されていることになる。また、堤の下部は地山を削りだしたものであったが、その斜面の勾配はやや緩やかで、約30度の角度で堤上部へ上がっていく。なお、堤斜面の埋土には、小片ではあるが、土器が包含されている。また、最下層の暗灰黄色砂質シルトは、比較的均質で堤崩落時の堆積土である可能性が高い。明確な時期を提示できないが、平安時代頃であろうか。

摩湯山古墳は、畿内でも屈指の前期大型前方後円墳である。しかし、墳丘の測量図は、現在も梅原末治氏が昭和７年に作成した略測図しかなく、周堤も含めた正確な墳丘測量図の作成は急務であろう。

さて、摩湯山古墳の墳丘には、三重に円筒埴輪列がめぐっているという指摘があり、器財埴輪や鰭付円筒埴輪、朝顔形埴輪なども含まれているという。葺石については、密に葺かれていたらしい。また、墳丘のくびれ部を結ぶ線上に中堤があるが、これは古墳築造時のものと考えられ、この中堤の存在によって周濠は階段状になっている。周濠は、前方部側だけみれば馬蹄形を呈しており、その外側にはおそらく周堤がめぐっていたのであろう。埋葬施設については、明確ではないが、後円部中央が広く凹み、石材が散乱しているという。採集された緑泥片岩の破片によって竪穴式石室の存在が想定される。棺構造や副葬品についてはよくわからない。さらに、陪塚として５世紀初頭頃に、二神二獣鏡や管玉などが出土した馬子塚古墳が築造されている。おそらく、摩湯山古墳は４世紀末葉頃に築造された和泉地域最古の大型前方後円墳であろう。



第21図　調査区全景（右側が摩湯山古墳前方部）

雁屋（かりや）遺跡（９７０１５）

（１）四條畷市雁屋北町　　（２）1480㎡
（３）平成９年８月10日～平成10年９月30日
（４）府立四條畷高等学校校舎建替　　（５）阿部 幸一

遺跡は生駒山地の北部、飯盛山の西麓、権現川水系によって形成された扇状地の末端部近くに立地する。この遺跡は、1982年に住宅建設の際に発見された。その後、四条畷市教委や府教委の調査によって弥生時代前期～後期の方形周溝墓群や住居跡が確認され、北河内地域の代表的な弥生遺跡として周知されている。

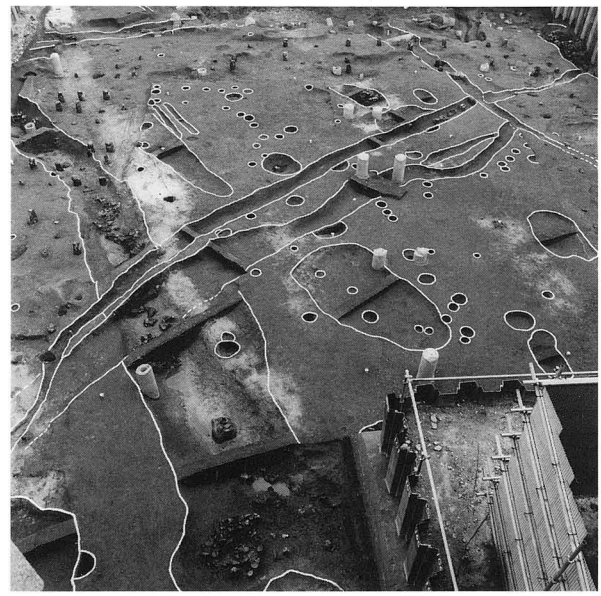
調査は、府立四条畷高校の校舎建替えに伴うものである。同高校内ではこれまでに1986年、1993年、1994年の３回発掘調査が実施され、近中世耕作溝や奈良時代の河川、弥生時代中期の方形周溝墓や、後期の住居跡、井戸、溝、土坑などが検出されている。

今回の調査でも近・中世の耕作溝、奈良時代頃の小河川、弥生時代後期の住居跡、溝、土坑など多数の遺構を検出した。

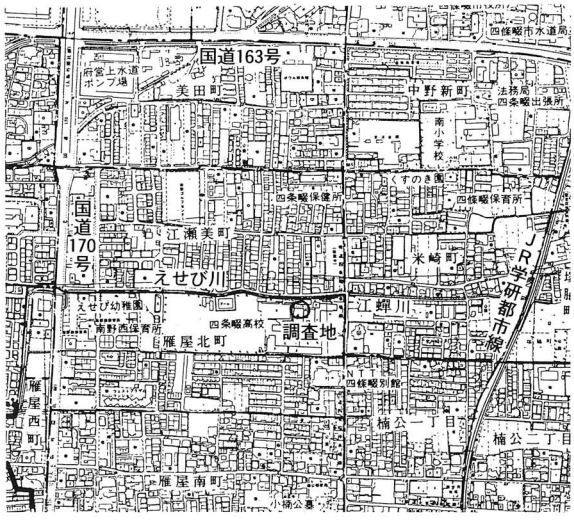
近・中世耕作溝は、調査地が一部撹乱されていたので、調査区西側でのみ検出した。方向はほぼ南北で、この地域の条里里道（学校東側の旧河内街道）と一致する。

奈良時代頃の小河川（001－ＳＲ）は、調査区の南部を南西方向に弥生時代の遺構面を浸食して流下する。幅約１ｍの小河川で、古墳時代中後期の遺物を特に多く含んでいる。雁屋遺跡に東接して古墳時代の遺跡（南野米崎遺跡）が確認されている。そこから流出した遺物であろう。また、奈良時代頃の河川は過去の調査でも数条検出されている。いずれも幅数ｍで、流路は東から西か南西方向である。

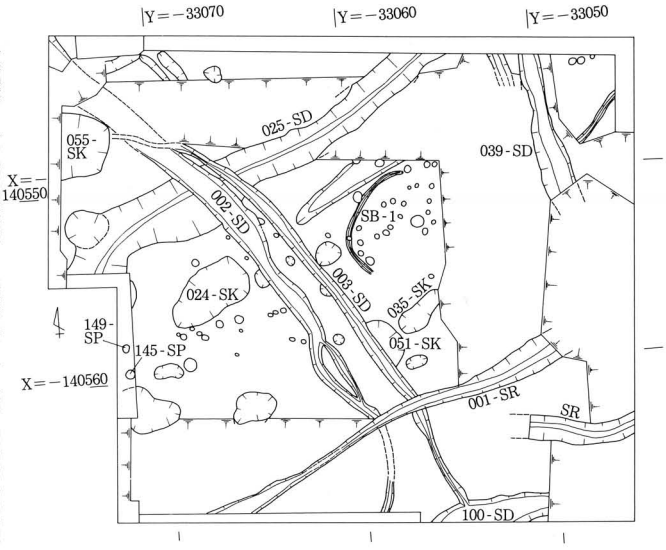
弥生時代後期の住居跡（ＳＢ－１）は壁溝の一部と炉跡を検出した。壁溝と炉跡の位置から５～６ｍ前後の隅丸方形プランの竪穴住居を復元できる。床直上に薄く灰層が観察されるので焼失家屋とみられる。溝は大小５条以上を検出した。調査区北部で検出した025－ＳＤは幅２ｍ、深さ1.2～1.5ｍを測るＶ字溝で、後期前半の遺物を多量に検出している。94年度調査でもこれに繋がる溝が検出されている。環濠ではなく、集落内を貫流する溝であろう。



第23図　弥生時代後期遺構面



第22図　調査地位置図



第24図　弥生時代後期遺構面全体図

吉志部（きしべ）遺跡（９７０１６）

（１）吹田市岸部北４丁目　　（２）92㎡
（３）平成９年８月20日～８月28日
（４）都市計画道路豊中岸辺線建設　　（５）山上　弘

調査の目的

本調査は、都市計画道路豊中岸辺線建設に先立つ試掘調査である。

吉志部遺跡にかかる道路予定地の現状は、吹田市立岸部第二小学校用地として造成された平坦地と小路新池の埋立地である。このため遺跡がどの程度埋没しているのか、或いはすでに削平を受けているのかが不明であり、本工事に着手する以前に遺跡の残存状況を把握することを目的として調査を行なった。

遺跡の概要

吉志部遺跡は、千里丘陵の東南端に位置し、旧石器・縄文時代の石器が出土することで著名である。また調査地北側の紫金山と呼ばれる小丘陵には、吉志部神社が鎮座し、平安遷都に伴う造宮瓦窯跡として成立した、吉志部瓦窯跡が遺され史跡に指定されている。また、同じ丘陵の東側には聖武朝難波宮の造営に伴う造宮瓦窯跡である七尾瓦窯跡も調査され史跡に指定されている。

調査の概要

吉志部瓦窯跡に隣接する道路予定地は、本来紫金山から連続する丘陵斜面と、丘陵を下った平地部分を通過する。このため、旧地形を把握できる三ヶ所の調査区を設定した。

97－１区　学校の敷地造成によって造られた平坦面に設定した調査区でＴＰ30.4mを測る。地山の削平が予想されたため、旧地形残存位置の把握を目的とした。その結果、調査区南東端で旧地表の残存が確認され、そこから南東側に落ちる斜面の旧状が残されていると考えられる。北西側については削平を受け遺構等は残存していなかった。

97－２区　97－１区の南東側に一段下った造成面に設定した調査区でＴＰ24.8mを測る。旧地表は深く埋没し、ＴＰ22.7mで検出した。層序は、①盛土（山砂）２m、②盛土（青灰色粘質土）10㎝、③暗灰色粘質土10㎝、④灰色粘質土10㎝の順に観察され、ＴＰ22.5mで地山に達する。

地山面では２条の溝状遺構を検出した。東側の溝は、幅30㎝以上、深さ10㎝以上、黄灰色粘土を埋土とし、平安時代の瓦の細片とともに、下図に示した軒平瓦が出土した。また③及び④は遺物包含層である。

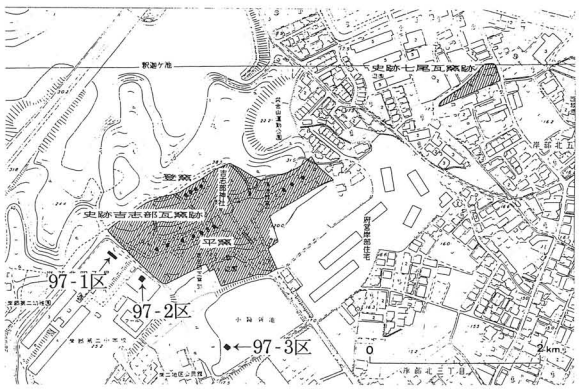
97－３区　小路新池と呼ばれる溜池を埋立てた場所に調査区を設定した。ＴＰ18.3mを測る。溜池底以下に遺構及び包含層が残されているかを目的とした結果、堆積状況から溜池は旧地形を掘り下げて造られたものと考えられ、それ以前の遺構・遺物は検出されなかった。

調査の成果

道路予定地内での今回の試掘調査の結果、最上段は地山が削平され、最下段も溜池築造によって古い遺構が削平されたものと考えられる。この両者に挟まれた部分には、旧地形が残され、遺構が拡がっていると推定される。

97－２区で出土した軒平瓦は、平安宮所用瓦として吉志部瓦窯で生産されたものである。焼成不良でかなり軟質である。表面は暗灰色を呈し、燻しに失敗して廃棄されたものと考えられる。

調査区は、吉志部瓦窯の西側に隣接している。遺構からこのような瓦が出土することから、吉志部瓦窯に直接関連する遺構が道路予定地内に拡がっているものと考えられる。



第25図　調査地位置図

第26図　97－２区出土軒平瓦

池上曽根遺跡（９７０１７）

（１）和泉市池上町　　（２）5000㎡
（３）平成９年８月17日～平成10年３月31日
（４）府道池上下宮線建設　　（５）藤澤 真依・井西 貴子

池上曽根遺跡は大阪湾の南側沿岸部、大阪府和泉市池上町と泉大津市曽根町に位置する。今回の発掘調査は史跡池上曽根遺跡の環濠より外側の東側地域で実施した。府道池上下宮線建設に伴う調査で、平成８年度調査時に未買収であった７箇所で実施した。調査区ごとに概略を説明する。

１区　盛土を除去後、すぐに黄色礫（段丘面）となる。後世にかなり削平を受けており、遺構・遺物は検出されなかった。８年度調査区で、遺構面が残っていた部分では方形周溝墓が検出された。

２区　遺構面は７面。弥生時代～奈良時代はほぼ南東～北西に川が流れ、平安時代以降は徐々に埋没し、13世紀後半には２間×３間の総柱建物と区画溝を検出した。

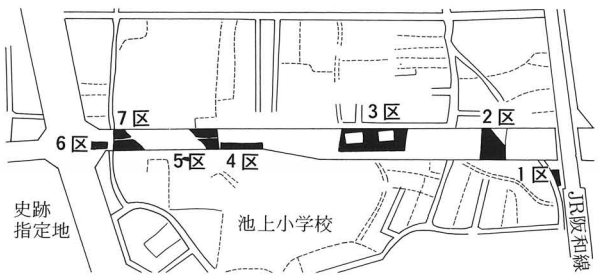
３区　弥生時代中期の方形周溝墓を２基検出し、それぞれから木棺の痕跡を５基確認した。東側の墳丘はかなり削平されていたが、西側の墳丘には盛土が残っていた。盛土は築造当時の表土層である灰白色土と下層の黒褐色粘土・黄色粘土のブロック土である。周溝内より高杯、壺、鉢、甕等の土器が出土した。

４区　遺構面は７面。弥生時代中期は沼、台状の高まりを検出した。台状部には盛土があり、盛土内から壺・甕・高杯等が、裾部から底部穿孔壺・水差・高杯等が出土した。方形周溝墓の可能性が考えられる。古墳時代は調査区東側で南西から北東に流れる川を検出した。平安時代以降は水田として利用されており、西端で北東～南西に伸びる条里の坪境にあたる畦を検出した。

５・７区　遺構面は５面。調査区中央部では弥生時代中期まで南から北に流れていた川を検出した。川内より多量の土器が廃棄された状態で出土した。後期末～古墳時代初頭の一時期調査区西端で南から北に流れる川を検出した。

６区　遺構面は７面。弥生時代中期の溝を３条検出した。１条の溝は完形の土器が出土していることと屈曲する溝の内側が高くなっており、方形周溝墓と考えられる。

８区　旧の農業用水路に削られた方形周溝墓を検出した。盛土の状況は３区で検出した西側の方形周溝墓と同じであった。

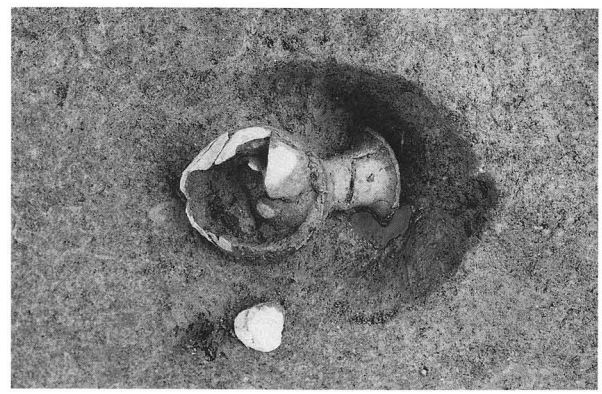


第27図　調査区位置図

まとめ

調査域は池上曽根遺跡の居住域（集落部分）の東側に当たり、弥生時代以前～中期までは川の本流が流れていたため、大規模な土地利用は行われていなかったようである。中期後半には川の本流がなくなったようで方形周溝墓を築造し、墓域として利用し始めた。古墳時代になると小規模で断続的であるが再び川が流れるようになり、目立った利用はされていないようである。平安時代以降は坪境に畦などがあり、北東側に現在も条里地割が認められることから、水田として利用され今日に至ったようである。

第28図　方形周溝墓検出状況（３区）


第29図　ＳＸ127土器出土状況（６区）

堺環濠都市遺跡（さかいかんごうとし） ＳＫＴ７２３（９７０２３）

（１）堺市寺地町西２丁33　　（２）196㎡
（３）平成９年９月19日～10月９日
（４）府営寺地住宅建替　　（５）竹原 伸次

今回は、建物の基礎によって遺構面が破壊される範囲の調査を実施した。面積46㎡（下法）、深さは2.5mである。

現代の盛土約40㎝を除去すると、第２次大戦の空襲による焼土整地層が約40㎝続く。この焼土層より下には、約60㎝～120㎝の厚さで明黄褐色の均質な砂層が堆積している。

この層を除去すると、調査区の南西端より、北西から南東方向に向かう道路と、この道から北東に向かう道路を検出した。この面を第１遺構面とした。両道路とも片側の路肩のみを検出したに止まるため、道路の幅等は不明である。また、他の遺構はなかった。

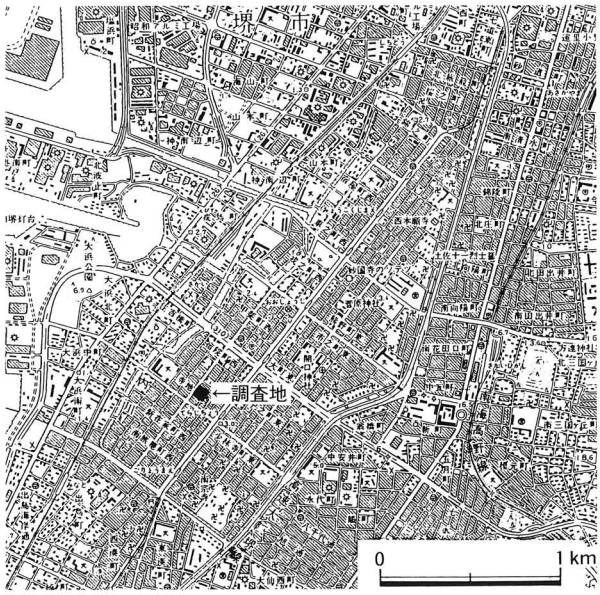
道路は、厚さ約５㎝～10㎝の褐灰色や明黄褐色の固く締まった砂層で構成され、約40㎝の厚さを測る。この道路は、元禄２（1689）年に作成された堺大絵図にも記載されている。

道路を除去すると焼土層となる。厚さは、約10㎝～60㎝であり、多量の瓦が出土した。

焼土層の下から、第２遺構面を検出した。第１遺構面から検出した道路はこの面にはない。

調査区の南西端から蔵１、北西端から蔵２、３を、中央部からは礎石建物、露地、埋甕を検出した。蔵２、３は磚列を残していたが、蔵１の磚は抜き取られていた。調査範囲が狭かったため、蔵、建物の全容は明らかにできなかった。

蔵１及び第２面から出土した遺物は、時期的には16世紀後半から1615年の間におさまる。また、上層に焼土層があることから、第２面は1615年の大坂夏の陣によって焼き討ちにあった面であると考えられる。また、第１面の道路は、江戸初期の再整備の際に作られたものと考えられる。



第30図　調査地位置図

第31図　調査区全景

第32図　蔵２・３

第33　蔵１出土遺物

余部（あまべ）遺跡 その１（９７０２７）

（１）美原町南余部　　（２）8500㎡
（３）平成９年８月26日～平成10年３月31日
（４）府営美原南余部住宅建替　　（５）枡本　哲・森屋 直樹

余部遺跡（その１）の調査地点は、西除川左岸流域に形成された、中位段丘面上に位置する。南余部の旧集落は東約300m、近畿自動車道並びに府道松原泉大津線建設に伴って実施された北方の日置荘遺跡の発掘地点とは約700m隔たっている。

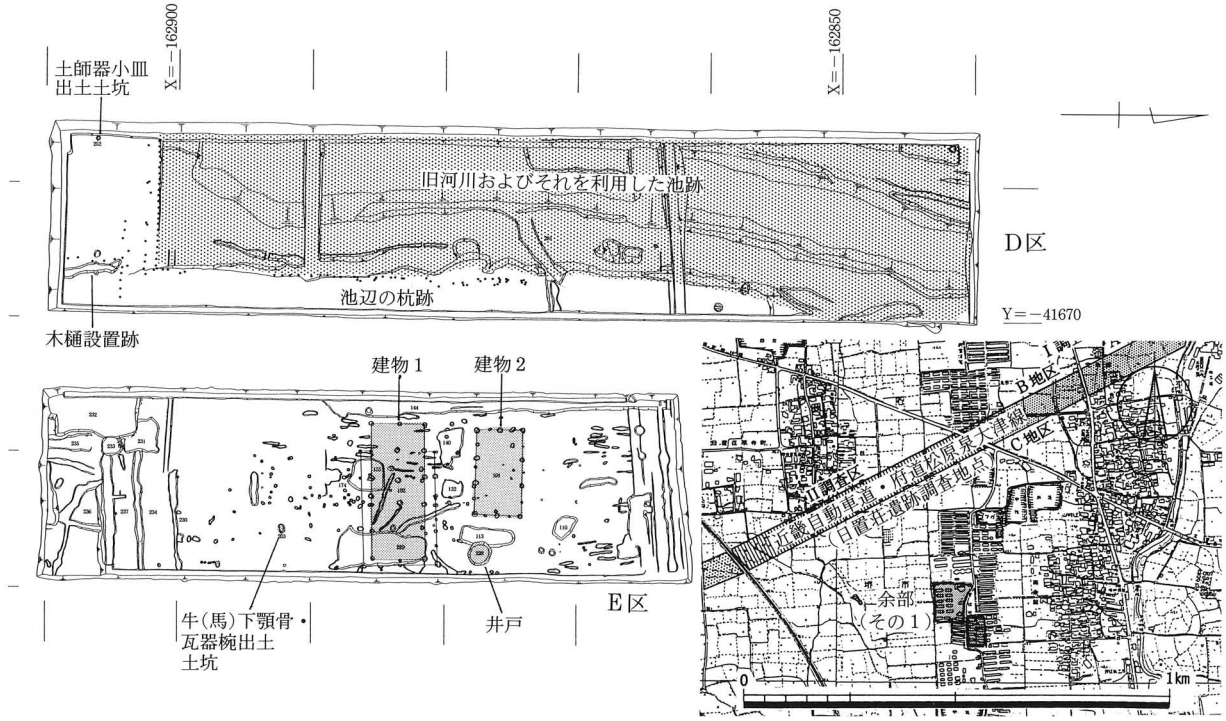
今回の調査によって、古墳時代、中世の遺構・遺物が検出された。また遺物のみからすれば旧石器時代～弥生時代にまで遡る資料も得ている。調査区は中央を南北に通る市道を挟んで、大きく東側（Ａ～Ｃ区）と西側（Ｄ，Ｅ区）に二分する形となった。

西側では古墳時代前期の溝、土坑、中世の耕作溝、轍などを検出した。東側では中世の掘立柱建物２棟（２間×３間、２間×５間）、井戸、旧河川の埋没過程を利用した池、築堤、その下に木樋、さらに儀礼的意味をもつ小土坑（土師器小皿２枚１組３セット出土ピット、瓦器碗と牛（馬）下顎部位の出土土坑）などが検出された。建物や井戸といった生活の直接の場はE区の一定の箇所に、一定の方向性をもって集中している。Ｄ区で検出された池跡との位置関係からすると、この生活の場が貯水利用と何らかの関わりがあって殊更池端に設けられた可能性がある。

総じていえば、中世以前の遺構・遺物は西側に偏り、中世は西側が耕作地、東側が生活の場という感じを受ける。このような土地利用のありかたは、一部現在の市道と重複する旧河川の位置と関係があるかも知れない。また中世以前の遺構が条里以前の地形に左右され、中世のそれが条里の方向性に合致する。このことから当地の大規模な開墾は中世に至って行われたと考えられる。特にＤ，Ｅ区の遺構やそれを覆う包含層からの出土遺物からすると13世紀中頃がこの調査地点で指摘できる中世のひとつの画期と捉えられる。

しかしまた、それ以前の遺構は中世の開墾によって消滅した可能性も大きいので、この時期の遺構分布の具体的なありかたは今後の調査結果を俟って判断しなくてはならない。

13世紀中頃に旧河川の埋没過程の凹地を地割に沿った形で整え利用された池は、少なくとも明治８年（1919）陸地測量部地図には既に明示されていないので、近代以前には埋め立てられて耕地化されたらしい。いずれにしても本調査区北の新池、中池、コマケ池から南の枡池（府営住宅建設時に埋め立て）、中池、掛池とともに一連の西除川の旧流路跡であったということができる。



第34図　調査区位置図・主要遺構配置図

余部（あまべ）遺跡 その2（９７０２８）

（１）美原町北余部　　（２）7500㎡
（３）平成９年９月25日～平成10年３月31日
（４）府営美原北余部住宅建替　　（５）林　日佐子・小浜　成

余部遺跡は、和泉山系から北に伸びる羽曳野丘陵と陶器山丘陵に挟まれた扇状地形上にあり、狭山池から北流する西除川の西側に広がる沖積段丘面に立地している。この地域は、古くから文献などで河内鋳物師の本拠地として全国的に知られており、周辺の太井・真福寺・日置荘遺跡などと同様の、鋳造関連遺構が数多く見つかっている。

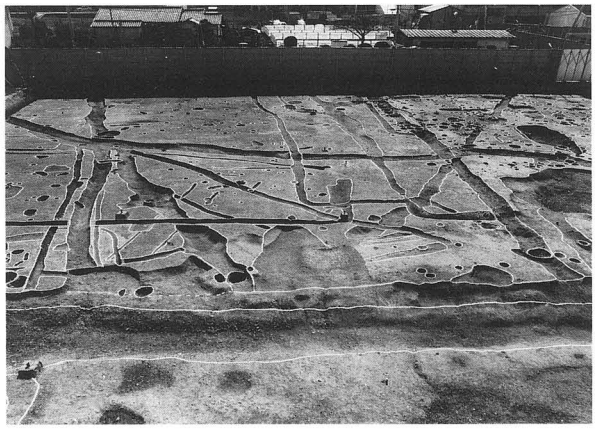
今回の府営美原北余部住宅建替工事に伴う調査で、13世紀前～中葉を主とする鋳造関連遺構や鋳造工房、方形の区画溝で広範囲に区画し掘立柱建物群を配する屋敷地を発見した（第35図）。区画溝は、西辺と北辺を確認した。西辺は長さ約48m、幅約２～2.8m、深さ約１m、北辺は長さ63m以上、幅約２～2.7m、深さ約１mを測る。この区画溝内は、南北や東西方向の数本の細い溝でさらに区切られている。掘立柱建物は西半にかなり重複して集中しており、数度の建て替えが行われたと考えられる。建物配置は整然と南北・東西に軸を合わせている。区画溝の西辺および東部ではそれぞれ２間×６間、２間×４間の南北に長い建物を配し、その間に５間×３間の四面庇付の東西棟建物、その両脇に１間×２間以上の南北棟建物を配するコの字状配置を想定できる。また、区画溝の北西隅が完全に結合せず途切れることから、屋敷地と鋳造工房との移動を可能にする通用口のような役割を担っていたのではないかと考えられる。

鋳造工房は、屋敷地の西側に南北に広く展開する。主軸は南北方向にあり、屋敷地と軸を共通にすることからも同時共存の可能性が高い。南北に連なる工房群の東側には南北方向の溝が接しており、鋳造作業に伴う可能性がある。鋳造関連遺物を出土する土坑は、大半が掘立柱建物内に取り込まれており、工房内の鋳造作業空間だと考えられる。復元可能な鋳造工房は、すべて南北に主軸をもつ東西２間の建物であり、鋳造作業空間は建物の南部分に位置し、作業の種類や必要に応じて張り出し部分を設けていたと想定される。

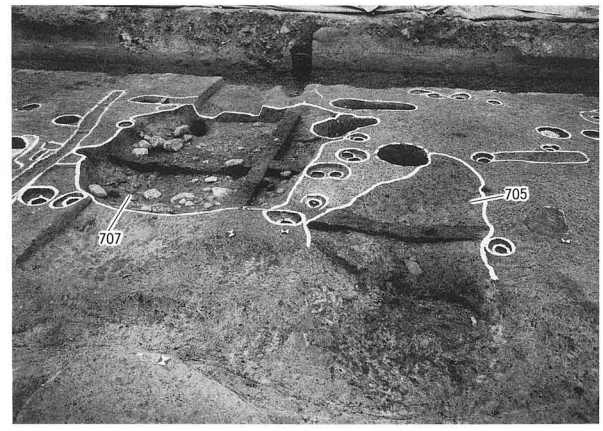
また、単独に鋳造遺構のみを囲う工房も存在している。一辺約2.5mの隅丸方形の平面プランで、残存の深さ約50㎝の鋳造土坑707（第36図）は、土坑底面から整地土を積み、小礫を敷き並べており、壁周りには火を受けている人頭大から拳大の石がある。隣接する鋳造土坑705は深さ約20㎝でやや浅いが、整地土があり拳大の石を配しており、こしき炉の炉床の可能性もある。ともに埋没土の中に炭や焼土塊・鉄滓などを含むことから、一連の鋳造作業を行う遺構であると考えられる。

鋳造土坑707は、底面中央に青磁の高台部分のみを上面にして置いており、鋳造土坑構築の際の祭祀状況も明らかになった。

今回の調査で、一辺50m以上の溝で方形に区画した、河内鋳物師を掌握していたであろう有力者層の屋敷地とその外側に展開する鋳造工房群の存在がセットで確認でき、生産域の想定もできるなど、従来集落や鋳造遺構が個別でしか把握できていなかった中世河内鋳物師の実態解明に重要な成果をあげることができた。今後、周辺の調査によって、実際に鋳造に関わった人々の居住域が明らかになれば、隣接する日置荘遺跡と合わせてその全体像をより明確にすることが可能になろう。



第35図　区画溝内



第36図　鋳造土坑

安威（あい）遺跡（９７０３１）

（１）茨木市安威１丁目他　　（２）1400㎡
（３）平成９年９月29日～平成10年３月31日
（４）主要地方道茨木亀岡線改良　　（５）酒井 泰子

安威遺跡は茨木市の北東部に位置しており、大阪府・京都府境をなす山地から平坦部への地形変換点に立地している。遺跡の東側400ｍを安威川が蛇行しながら南流しており、調査区付近はその氾濫原にあたっている。

今回の調査は主要地方道茨木亀岡線を拡幅するのに先立って実施された。調査は２地点を３区にわけて行い、北から着手順にＡ～Ｃ区とした。

Ａ・Ｂ区　遺跡の北東隅にあたり、計700㎡を２区に分けて調査した。ここでは西側の丘陵から安威川に向かって傾斜する地形とその下の平坦面を検出した。Ａ区西北隅が一段高くなっており、傾斜面とその直下でピットを疎らに検出したものの、生活の痕跡はほとんど感じられなかった。

Ｃ区　Ａ・Ｂ区から南に約100ｍ離れた交差点の北側約700㎡を対象にした。南半は盛土と旧耕土を除去した後、遺構面を３面検出した。北半は旧耕土の直下が地山面になっていた。第１・２面には明確な遺構は存在しなかったが、第３面で古墳時代後期の集落の一部を検出した。

第37図　調査地位置図

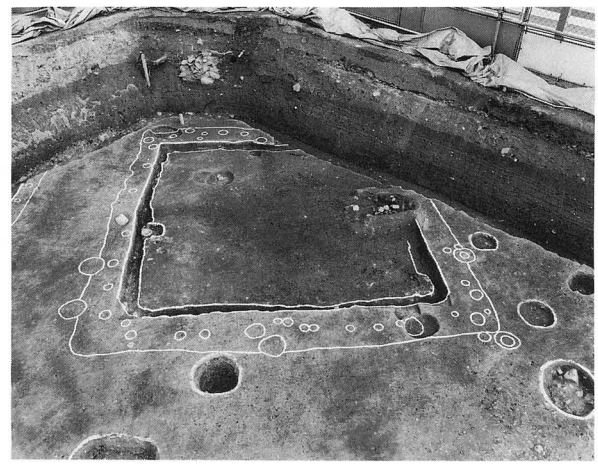
幅約11ｍ、延長約40ｍの調査区の中央を斜めに幅約20ｍの大溝が横切っている。その南側で竪穴式住居３棟、掘立柱建物１棟やピット等を検出した。大溝以北には遺構は存在しなかった。

大溝の南側には高さ20㎝程度の盛土が幅４ｍ程の広がりで続いており、堤の痕跡と思われる。盛土下で土坑１基が存在しており、付近の堤上では須恵器・土師器が集中して出土した。土坑には土器がまとまって廃棄されており、その時期は５世紀後半と考えられる。

竪穴式住居３棟と掘立柱建物はいずれも主軸を南北から約40°西に振っている。切り合いから竪穴式住居が先行することを確認した。南端で検出した住居は一辺約４ｍを測り、南西辺中央に竈をもつ。床面で主柱穴は検出せず、プランの60㎝外側にも方形の掘り方のラインが巡るなど、特異な構造である。他の２棟は一部しか検出していないが、同様のものである。出土した須恵器から５世紀末～６世紀初と考えられる。

検出した遺構はすべて古墳時代以降のもので、その分布は調査区の南に偏っており、安威遺跡の古墳時代集落はＣ区以南に広がっていると推定される。Ｃ区大溝以北ではＡ・Ｂ区も含めて遺物も希薄で、集落域からはずれていると考えられる。この大溝が集落の北を画している。大溝の南側には堤を築き、その南側に竪穴式住居等が営まれている。今回の調査では、大溝と堤で画された集落の北限の状況を明らかにできた。

第38図　第３面全景（Ｃ区）



第39図　竪穴式住居検出状況（Ｃ区）

みかん山古墳群（９７０３２）

（１）東大阪市東豊浦町　　（２）3600㎡
（３）平成９年８月18日～平成10年２月29日
（４）府立枚岡公園駐車場建設　　（５）奥　和之

位置と現状

みかん山古墳群は、生駒山西麓の標高100m前後に10基の古墳が群集している。今回、府営枚岡公園の駐車場建設に先立ち、４基の古墳を調査した。調査地区は、近年まで畑地として耕作されいたため、古墳の大半は墳丘を削平されていた。

調査成果

７号墳　当古墳は、東と北と南の周濠が残っていたことにより古墳と確認できた。一辺約８ｍの方墳である。

周濠内から須恵器の坏・甕・壺が出土した。

８号墳　当古墳は、７号墳の南西に位置し、斜面の上方に三日月状の周濠が残存していたことにより確認された。径約10mの円墳である。

須恵器の無蓋高坏１点・有蓋高坏５点・器台１点・甕２点と鉄片が周濠内から出土した。

９号墳　当古墳は、８号墳の西、10号墳の北に位置し、尾根の上方を削りだして周濠とした東西約15.5m、南北約17.5mの円墳である。墳丘は、削平されていたが、外護列石の一部が残っていた。

埋葬施設は、南に開口する玄室長4.0m、玄室幅1.6m、羨道長6.2m、羨道幅1.4m、全長10.2mの左袖の横穴式石室である。玄室床面は、扁平な石を使用した敷石の一部が、羨道入り口には拳大の閉塞石が残っていた。

墓道は、地山を削りだし、羨道から出ると、南にある10号墳の周濠を避けて、すぐに直角に西の斜面側に折れて造られている。

副葬品は石室内から、須恵器の坏蓋３点・脚付き壺１点・土師器の高坏１点、鉄釘が出土した。周濠内から耳環１点と須恵器の甕が破片で出土した。

墳丘内には、横穴式石室の西側に平行して、長さ0.7m、幅0.4mの箱式石棺が検出された。墳丘が削平されているため横穴石室と箱式棺の前後関係は不明である。

10号墳　当古墳は、９号墳の南に位置し、尾根の上方の北東側に周濠を掘り込んだ径16mの円墳である。墳丘の南東側と西側即ち石室の入り口両側に外護列石が残っていた。

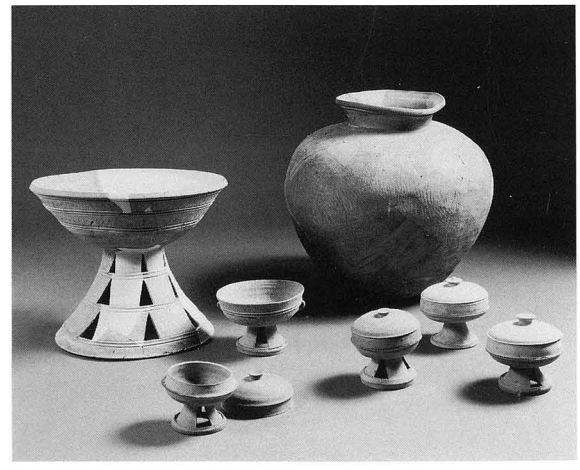
埋葬施設は、南に開口する玄室長3.1m、玄室幅1.8m、羨道長4.6m、羨道幅1.0mの全長7.7mの左袖の横穴式石室である。

副葬品は、奥壁近くから、須恵器の坏・坏蓋・高坏・鉄鏃・鉄斧が、羨道から、鉄釘、土師器の壺、須恵器の坏蓋２点が出土した。また、石室内から異形の台付き盌が出土している。

まとめ

今回調査の４基の古墳は、７号墳→８号墳→10号墳→９号墳の順番に５世紀後半から６世紀後半にかけて築造された。最後に築造された９号墳は、８号墳を避けて築造しため、墳形が楕円形になり、また、10号墳を避けたため、墓道は、直角に曲げなければならなかった。このように方墳から円墳へと墳形を変えながら、互いに古墳を意識し、破壊することなく、狭いところに築造されている状況から、古墳被葬者間の関連までの推測できる貴重な資料の一つである。

第40図　古墳群全景



第41図　出土土器

倉垣（くらがき）遺跡（９７０３３）

（１）能勢町倉垣　　（２）3000㎡
（３）平成９年８月21日～平成10年２月27日
（４）歌垣地区府営農村基盤整備　　（５）辻本　武

調査の概要

本遺跡は大阪府の北端の能勢町のなかの北東部にある倉垣地区内に所在する。当地区では農業基盤整備事業「歌垣第２地区」および同「歌垣地区」という二つの圃場整備工事が施工されてきた。今年度はこれらに先立つ倉垣遺跡発掘調査として、前者は1997年８月～11月の期間に約2,100㎡の面積で実施し、後者は同年12月～翌年２月に約900㎡の面積で実施し、並行して内業整理作業を行なった。

周辺の遺跡

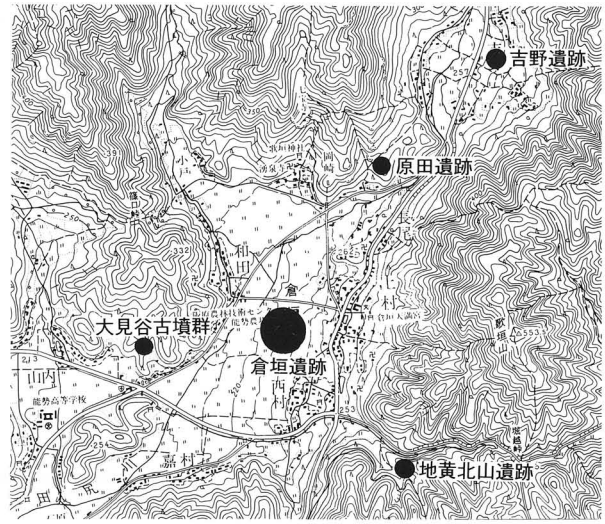
当遺跡は池田と亀岡とを結ぶ交通路の要所に当たる。周辺には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡が分布する。著名なものとしては、縄文時代では押型文土器の出土した地黄北山遺跡、弥生時代では完形の磨製石剣を棺内に埋納する方形台状墓を検出した原田遺跡、古墳時代では横穴式石室の分布する大貝谷古墳群、中世では大量埋蔵銭を遺跡発掘調査中に発見した吉野遺跡がある。

調査の成果

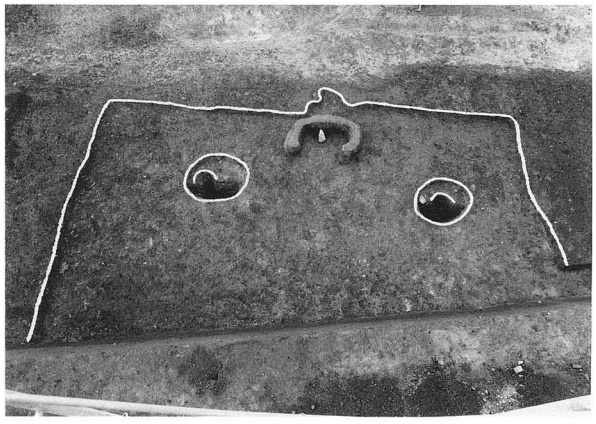
弥生時代　当時代の遺構は検出しなかったが、遺物では前期から中期にかけてのものがまとまった量で出土している。付近に当時代の遺構の存在の可能性が高い。

飛鳥時代　７世紀の竪穴式住居３棟と掘立柱建物２棟を検出した。竪穴式住居は一辺５ｍ前後の方形で、柱穴は４本、造り付けの竈をもつ。竈内からは長さ30㎝の支脚の石が立ったまま発見された。能勢町東部域の古墳時代末～飛鳥時代の竪穴式住居の竈には、支脚がそのまま検出される例が多く、今回もその例の一つである。掘立柱建物は東西２間（3.8m）×南北３間（4.2m）で、前述の竪穴式住居とは同時並存していたものと考えられる。他には屋外に設置された可能性のある竈一基を検出している。この竈は支脚とともに袖石が立ったまま出土した。

中世　13世紀頃の掘立柱建物２棟を検出した。建物の規模は東西１間（３ｍ）×南北３間（4.4ｍ）と東西２間（3.8m）×南北３間（6.6m）である。これらの建物の方向が、当遺跡周辺に良好に広がる条里制地割とは合わないことに注目される。



第42図　遺跡位置図



第43図　飛鳥時代の竪穴式住居

第44図　中世の遺構

中神田（なかかみだ）遺跡（９７０３８・５７）

（１）寝屋川市御幸西町　　（２）132㎡
（３）平成９年７月11日～11月24日
（４）御幸西調節池流入管渠立坑築造　　（５）今村 道雄

中神田遺跡は、古川の左岸、ＯＰ＋3.6m前後の低湿地帯に立地する遺跡である。これまでの調査によると、現地表80㎝下からは、13.14世紀の集落跡、さらにその下からは古い時代の島畑状の溝畦等が検出されている。

今回の立坑の調査区は、御幸西住宅４号棟の南側の市道上と府営住宅建替え予定地に位置する。

層序

立坑の盛土と旧表土を取り除いた層序は次のようになる。

第１層　黄茶色細砂、厚さは約10㎝である。近世以降の洪水による堆積土とみられる。遺物は出土していない。

第２層　青灰色細砂、厚さは約10㎝である。近世以降の堆積土とみられる。遺物は出土していない。

第３層　灰（黄）色粘土、厚さ約10～25㎝である。遺物は出土していない。

第４層　オリーブ灰色粘土、厚さ約10～20㎝。鉄、マンガンが多く沈着している。遺物は土師器が出土している。第１遺構面の畦畔の盛土とみられる。

第５層　黒灰色粘土、厚さ約５～15㎝。遺物は土師器が出土している。この層の上面には第１遺構面の溝が掘り込まれている。

第６層　灰黄色粘土、厚さ約15㎝。鉄、マンガンが多く沈着している。遺物は出土していない。

第７層　明灰黄色粘土、厚さ約30㎝。鉄マンガンが多く沈着している。遺物は出土していない。

第８層　明青緑色粘土、厚さ約５～20㎝。遺物は土師器、須恵器片が出土している。

第９層　黒灰色粘土、厚さ約５～20㎝。土層断面の観察で一条の畦畔を確認出来た。遺物は出土していない。

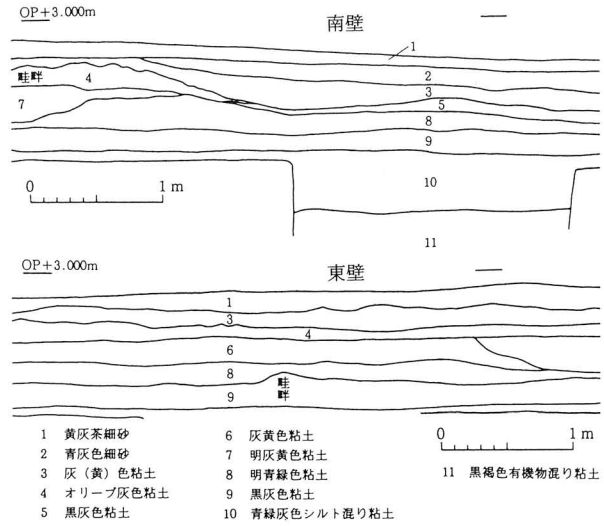
第10層　青灰色シルト混じり粘土、厚さ約50㎝。土層上面から４個所の土壙状落ち込みを検出した。遺物は出土していない。

第11層　黒褐色有機物混じり粘土、厚さ約50㎝である。遺構・遺物は出土していない。

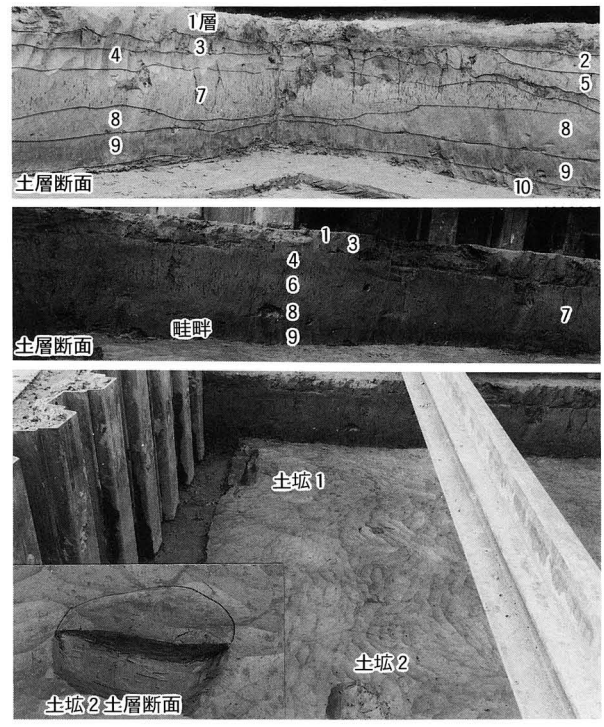
遺構

第１遺構面は溝と畦畔を検出出来た。盛土からなる畦畔とその影響を受け下に沈んだ第７層や鉄やマンガンが沈着した第６層の存在が水田や畑作に利用されたことを語っている。遺構の時期は出土遺物の保存状態や量が少なく決定しがたいが古代から中世の頃と考えられる。

第２遺構面からは大小の土坑を検出したが遺物は出土していない。遺構の性格は類例が増加した段階で検討を行ないたい。



第45図　土層断面図



第46図　第２遺構面・土層断面

三軒屋遺跡（９７０３９）

（１）泉佐野市長滝地内　　（２）500㎡
（３）平成９年11月１日～12月25日
（４）府営かんがい排水事業樫井川地区　　（５）上林 史郎

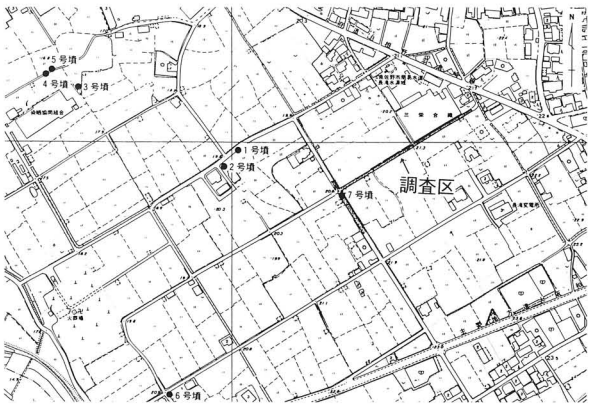
三軒屋遺跡は、樫井川東岸に展開する泉南地域でも屈指の大複合遺跡（縄紋～室町時代）である。遺跡は、ＪＲ阪和線を中心に東西1.4㎞、南北1.1㎞の広大な範囲に広がっており、遺跡内部には長滝古墳群も含まれている。

今年度の調査区は、ＪＲ阪和線長滝駅の西南部、府道日根野羽倉崎線南側の農道内に位置し、総延長は約300ｍをはかる。ただ、調査区が農道内にあるため、２～３日の内に開削、調査、埋め戻し、仮復旧という工程を完了しなければならなかった。そのため、一日で完了できる範囲は幅約1.6m、長さ約10ｍしかなく、それら一日の工程を約300ｍの調査範囲にわたって繰り返し実施した。

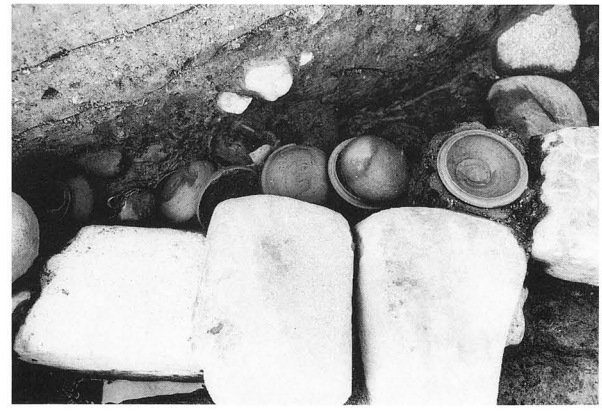
調査は、埋管設置の底面（道路面から約1.6m）及び溝などの深い遺構を除いて、地山まで掘削した。また、一部を除いて平面調査を実施しており、それに伴い写真撮影や平面図及び断面図などを作成した。調査区内で検出された遺構には、長滝７号墳の石室、奈良時代の大溝、中世のピット・落ち込み・土坑などがあり、悪条件にもかかわらず、予想以上の成果をあげることができた。

長滝７号墳は、調査区の北西端で検出された。古墳の墳丘は削平されていたが、良好に遺物が遺存する玄室の東半部を検出することができた。検出された墓壙の規模は、南北約2.2m、東西約1.1ｍをはかり、石室の内法は長さ約1.4m、幅約0.65ｍである。石室の石材は、奥壁及び東側壁の１～２段分のみで、奥壁４石、東側壁６石が遺存していた。また、下段の石は内側にその辺を揃えていた。全て石材は、樫井川流域で分布している河原石と考えられる。なお、石室の底面には敷石がなく、直接土間に木棺や副葬品を埋置したものと考えられ、後世の削平にもかかわらず、東側壁に沿って須恵器などの土器類がほぼ原位置で検出された。おそらく、西側には木棺が安置されていたと考えられるが、鉄釘などは出土しなかった。鉄釘を使用しない木棺なのであろうか。以上まとめると、長滝７号墳は長さ２ｍ前後、幅１ｍ前後の玄室を有する横穴式石室と考えられる。羨道の有無や石室プランについてはわからないが、その構築時期は出土土器から６世紀後葉頃と考えられる。

さて、長滝古墳群は、標高19m前後の低地に造営され、その範囲は府道大阪和泉泉南線から北側の樫井川東岸沿いの東西約400m、南北約450ｍの範囲に分布している。その中で、７号墳は最も東端の古墳になる。ただ、各古墳は農道敷設やその周辺の住宅建設などに伴う調査で検出されたものであり、現在古墳群内の大部分を占める畑や水田域には、おそらく数十基の古墳が埋没しているものと考えられる。これら各古墳は単独で立地しているのではなく、各々支群単位で密集して造営されているのであろう。古墳群は、５世紀中葉から造墓が開始され、６世紀後葉まで連綿と営まれるようである。また、奈良時代の大溝は現在の条里方向に一致するものであり、当地での条里施行時期についての貴重な資料といえる。さらに、数点出土している平瓦片は、調査区の北東部に位置した禅興寺との関連を示唆するものであろう。今回の調査は、試掘調査の連続のようなものであり、まさしく線的な調査であったが貴重な成果を得た。



第47図　長滝古墳群分布図（S＝1/10000）


第48図　長滝７号墳石室

上之郷（かみのごう）遺跡（９７０４５）

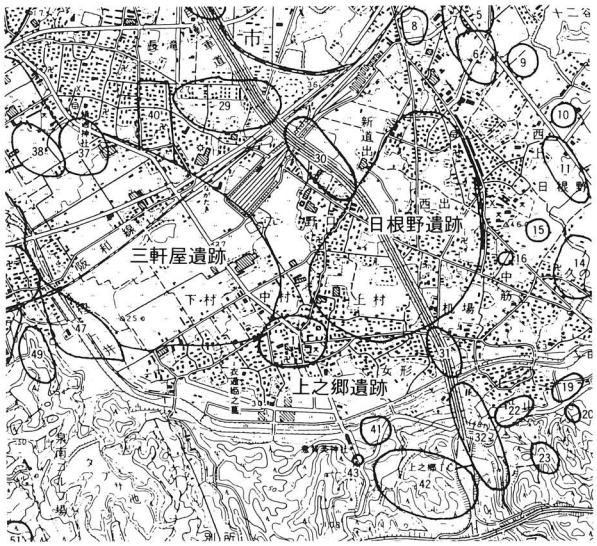
（１）泉佐野市上之郷地内　　（２）600㎡
（３）平成10年１月５日～２月28日
（４）府営水質保全対策事業泉佐野地区　　（５）上林 史郎

上之郷遺跡は、上之郷小学校を中心に、東西350m、南北250mという比較的狭い範囲に分布し、北東に日根野遺跡、北西には三軒屋遺跡という大規模な遺跡と接している。今年度の調査区は、上之郷遺跡と三軒屋遺跡の東南端部にまたがり、ほぼ上之郷集落の道路内に位置する。また、道路の両側は住宅や商店、小規模な工場などが密集しているため、調査を実施できなかった区間も存在する。さらに、調査区が生活道路の内部という性格上、一日のうちに開削、調査、埋め戻し、仮復旧という工程を完了しなければならなかった。そのため、一日で完了できる範囲は、幅約1.2m、長さ10～20mに過ぎなく、その工程を約500mの調査範囲にわたって繰り返し実施した。また、本調査区は直線状ではなく、その平面形は逆Ｚ字状を呈している。そのため、方眼による地区割りの使用は広範囲に及ぶため実施できなかった。そのかわり、パイプラインの工事用ポイントNo.４～No.14（50mピッチ）をそのまま使用して、調査を進めた。

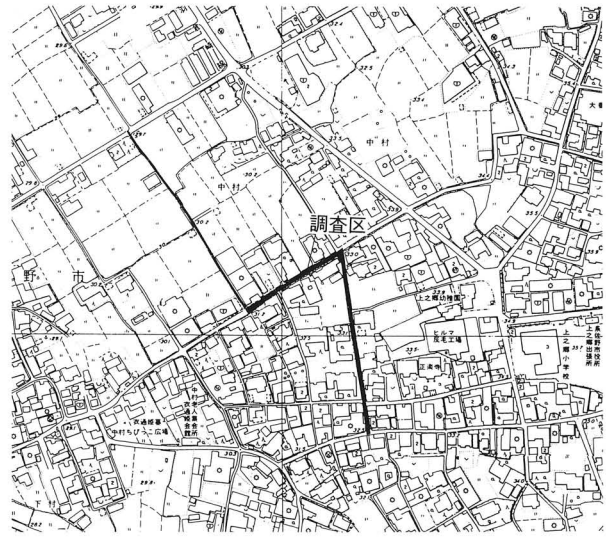
さて、調査区の土層堆積については、広範囲に及ぶため一様ではないが、基本的には上からアスファルト、路床、旧耕土、床土、近世に相当する黄褐色系砂質土、中世の包含層と考えられる灰褐色系砂質土であり、部分的にあるいは遺構の埋土として暗灰色砂質土が堆積している。今回の調査の対象深度は、埋管設置の底面レベルの関係上、地山まで達していないところが大部分であり、平均で道路面から１m弱である。そのため、平面調査を実施した調査区は限定されており、大部分が断面図作成が主目的になった。

調査地点の標高は、始点のNo.４付近がT.P.＋32.5m、終点のNo.14付近がT.P.＋29.7mと約2.8mの高低差がある。さらに、調査区の東側に位置する上之郷小学校付近ではさらに高く、T.P.＋35.7mをはかる。他の泉南地域同様、当地の地形は東南から北西へ傾斜している。この東南－北西の傾斜は、和泉山脈から大阪湾へ向かう方向であり、条里地割もこの方向に規制されている。

遺構の分布については、南端部のNo.４付近ではピットなどが集中していた。その地点から上之郷小学校までの約200mの範囲（現上之郷集落の中心部）に、中世の集落が展開しているのであろう。それに引き替え、調査区の北部No.10～14周辺では、東西方向の溝しかなく、ピットなどはみられなかった。なお、これらの溝には現在の条里地割の方向にも合致するものがあり、当地での条里施行時期の一資料になるであろう。すなわち、調査区の南半部は集落域、北半部は生産域に大別できよう。何分検出された遺構は、幅約1.2mの調査区内であるため、溝か、土坑か、落ち込みかの判断もつきかねるものが多かった。ただ、これら小規模調査の積み重ねが、古代～中世にかけての上之郷遺跡の性格を徐々に明確にしていくであろう。



第49図　遺跡位置図



第50図　調査区位置図

陶邑（すえむら）窯跡群 ＫＭ26・42号窯（９７０４６）

（１）堺市城山台５丁地内　　（２）753㎡
（３）平成10年１月７日～３月31日
（４）光明池地区府営ため池等整備　　（５）山田 隆一

今回の調査は、泉州農と緑の総合事務所堺分室を事業主体とする平成９年度府営ため池等整備事業「光明池地区」による巡回用の道路築造工事に先立って実施したものである。調査地は陶邑窯跡群の中の光明池地区に属し、光明池東岸に面した山林部である。調査地は２か所で、『大阪府文化財分布図』では、第１調査区は光明池26号窯、第２調査区は同42号窯として周知されている。

ＫＭ第26号窯（第１調査区）

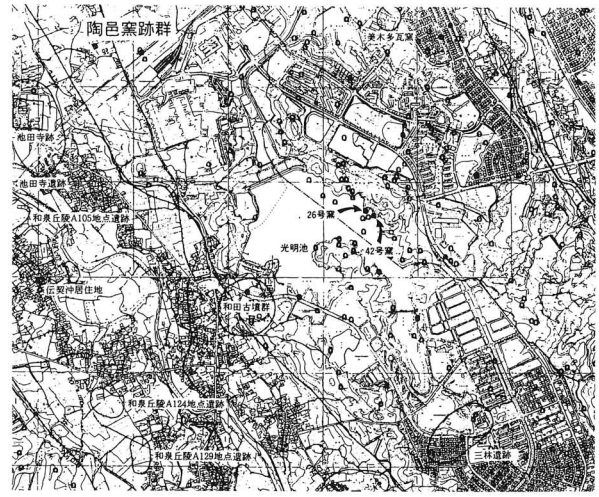
調査地は尾根地形の鞍部であり、残存する灰原の位置関係からすれば、窯体に相当する部分である。しかし調査においては、窯体片すら確認できず、光明池築造以後に人為的に掘削された林道によって破壊されてしまったことが推測できた。

なお、尾根地形西側で埋没谷を確認しており、灰原から流出した状況で、本窯で焼成した須恵器が多量に出土している。時期は、中村編年Ｉ型式５段階、田辺編年ＴＫ47型式程度である。

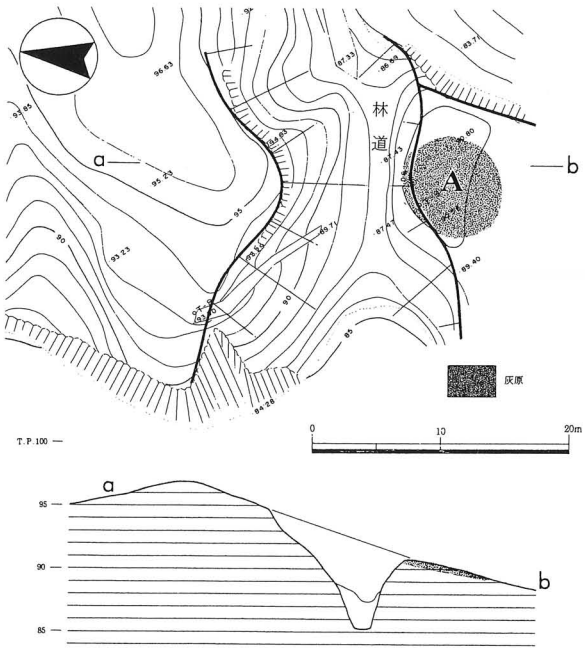
ＫＭ第42号窯（第２調査区）

調査地は緩傾斜の尾根地形周辺であり、試掘調査において、多量の須恵器が出土したために実施したものである。残存する灰原との位置関係からすれば、窯本体よりかなり下方で、遺構としての状況が全く不明であったため、その把握を眼目においた調査である。

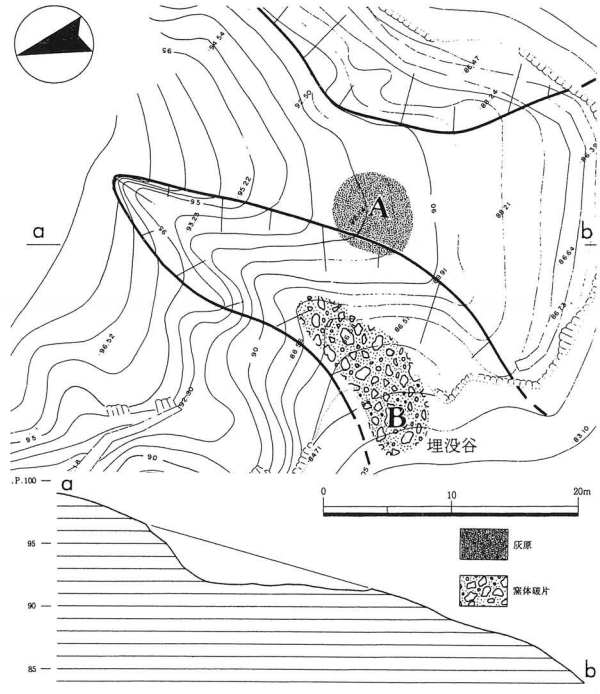
その結果、須恵器ばかりでなく多量の窯体片を包含した埋没谷を確認し、その谷は窯本体の想定できる部分から延びるものであることが確認できた。周辺の観察もあわせると、窯本体の大部分が損壊している、と考えられた。なお、窯体片の重なりから４回以上の焼成を行なったことも確認している。時期は、中村編年Ⅱ型式３段階、田辺編年ＴＫ43型式程度である。



第51図　調査地位置図



第52図　ＫＭ26号窯現況模式図



第53図　ＫＭ42号窯現況模式図

三軒屋遺跡（９７０４７）

（１）泉佐野市上之郷地内　　（２）600㎡
（３）平成９年12月26日～平成10年３月20日
（４）農用地総合整備事業下村地区　　（５）森屋 直樹

三軒屋遺跡は、泉佐野市の西南部、樫井川右岸に広がる低位段丘上に位置する縄文時代後期から近世まで連綿とつながる複合遺跡である。本遺跡の北側には、古墳時代中期から後期まで造営された長滝古墳群や白鳳時代の建立とみられる禅興寺跡が所在し、南東には平安時代の官衙的配置の掘立柱建物群などが検出されている上之郷遺跡がある。さらに東側には中世の周溝によって区画された居館跡が検出された机場遺跡が所在する。

農用地整備公団が施工する、泉佐野市上之郷及び泉南市兎田地内における農用地整備事業下村地区については、工事によって遺物包含層及ぶ遺構面が損壊するおそれのある水路部分について本調査を実施することした。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居１棟、中世の土坑や溝などを検出した。

三軒屋遺跡では遺跡の西側に比較的集中して縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺構が見つかっていた。なかでも樫井川の右岸に遺構が集中してみられる。

最近の調査成果では、遺跡北西側でも住居跡や方形周溝墓が検出されており、今回検出した住居跡も含めて、いくつかのブロックに分散されてみられるようである。

古墳時代の前期では流路から遺物を検出しており、上流となる東側に遺構の存在が考えられる。

また、中世には水田として開発された様子がうかがわれる。

ただし、包含層から青磁、白磁や瓦が出土しており、試掘の際に検出された白磁碗を副葬した土坑墓の存在からも、調査区から東側には集落や寺院、墓域の存在が考えられよう。

第54図　竪穴住居015

谷川（たにがわ）遺跡（９７０４９）

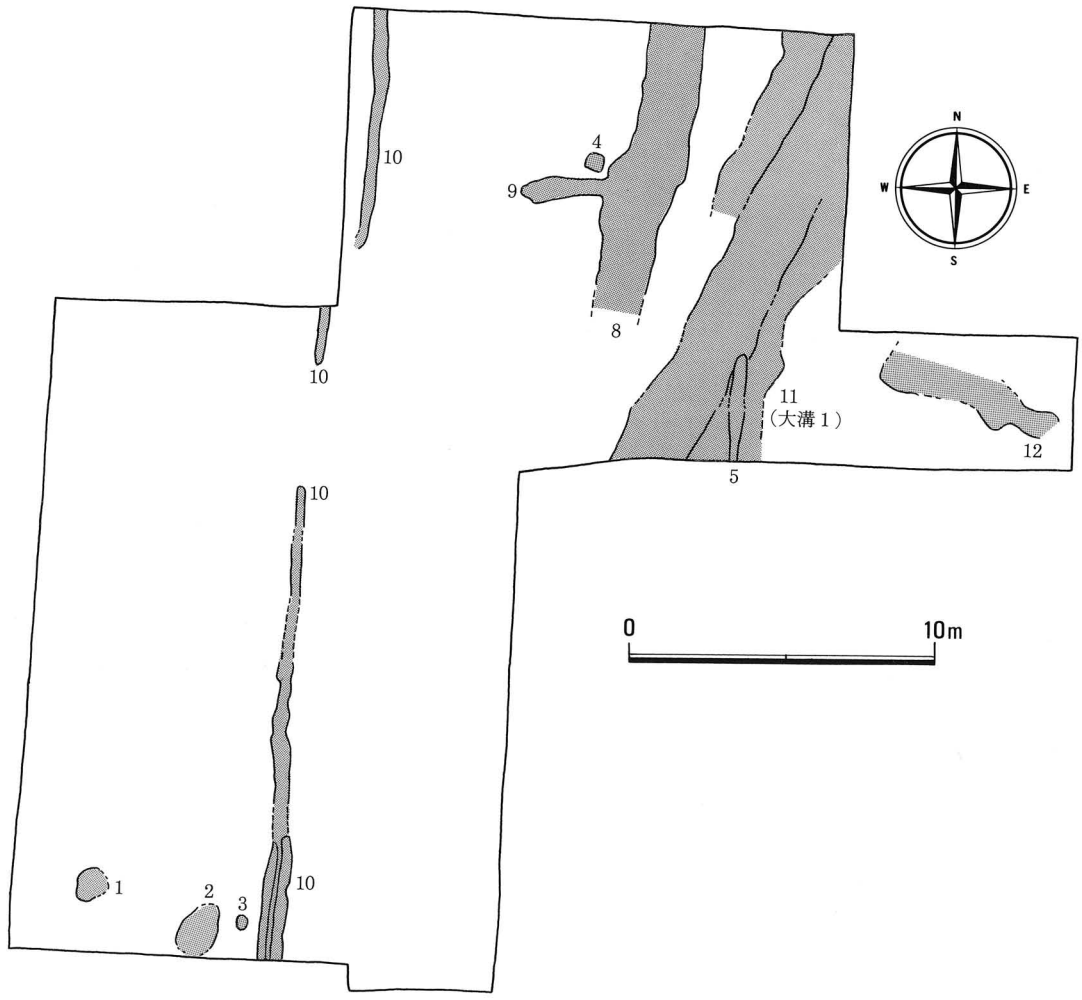
（１）富田林市谷川町　　（２）180㎡
（３）平成10年２月16日～３月30日
（４）府立富田林高等学校建替　　（５）井西 貴子

谷川遺跡は富田林市谷川町に所在し、平成４年、府立富田林高等学校の改築工事に先立って行われた試掘調査によって新規発見された遺跡である。平成６年度、特別教室、体育館等約5600㎡の調査が実施された。

遺跡は石川が形成した河岸段丘上に立地しており、標高は約63ｍである。平成6年度調査では、①旧石器時代の国府型ナイフ石器・翼状剥片・ナイフ型石器等が出土した。②縄文時代の石器、前、中期の土器が出土した。③弥生時代の住居跡や方形周溝墓、溝が検出された。④古墳時代後期の大型建物、掘立柱建物群、大土坑、柵列が検出された。⑤奈良時代の溝や竪穴住居や溝が検出された。⑤平安時代末から鎌倉時代にかけての住居跡や井戸、土坑、溝が検出された。等の成果が上げられている。

平成９年度は、６年度調査区の南側部分、約180㎡について実施した。平安時代末から鎌倉時代にかけての溝の続きが検出された。鎌倉時代に掘削されている溝は現在も残っている条里地割りと一致している。

今回の調査で特筆すべき遺構としては、大溝１があげられる。時期は古墳時代後期～平安時代である。現在は「深溝」と呼ばれる水路が粟ヶ池につながっているが、この「深溝」の機能を担う前身の溝である可能性が指摘されている。粟ヶ池の時期が現段階では不明であるので、推定の域はでないが、石川が形成した河岸段丘（左岸）の開発は古墳時代後期に開始される可能性が指摘できる。



第55図　遺構配置図

はざみ山遺跡（９７０５３）

（１）藤井寺市野中３丁目　　（２）18.9㎡
（３）平成10年３月４日～３月９日
（４）御陵西幹線下水道管渠築造　　（５）竹原 伸次

はざみ山遺跡は、藤井寺市の南部に位置する。現在まで、大阪外環状線建設に伴う調査や、大阪府、藤井寺市各教育委員会による国庫補助事業等に伴う調査が数多く実施されている。この結果、はざみ山遺跡は現在、旧石器時代、古墳時代、古代、中世の大複合遺跡としてその実態が明らかになりつつある。

今回は、大阪府下水道部による下水道管渠築造に伴い、３ヵ所の立坑部分の立会調査を実施した。この際、発進立坑１から遺物、遺構が確認できたため、発掘調査を実施したものである。

調査地は、墓山古墳の西約200ｍの位置にあたり、周辺の調査では、古墳時代、中世、近世の遺構、遺物を発見している。

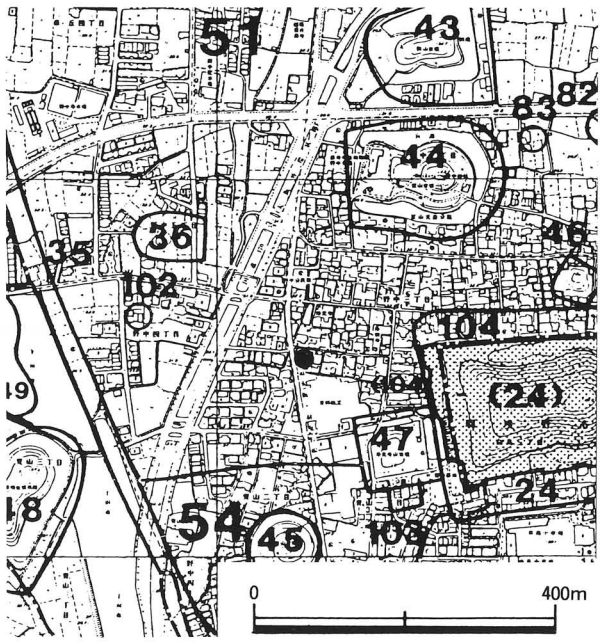
発進立坑は、長さ７ｍ、幅５ｍを測るが、道路にかかる部分はガス、水道の埋管によって遺構面が破壊されていたため、調査範囲から除外した。このため、道路から西側に長さ約７ｍ、幅約2.7ｍの調査区を設定した。また、道路側溝を移設する必要があったが、この部分については、幅が狭かったため立会調査とした。

アスファルト５㎝、盛土約10㎝を除去すると、調査区北端から約２ｍの範囲に、にぶい黄褐色砂質土が平均して約15㎝ほど堆積している。この層からは、埴輪片、土師器、瓦器等が出土した。調査区の南側５ｍは、盛土以下すぐに地山となる。

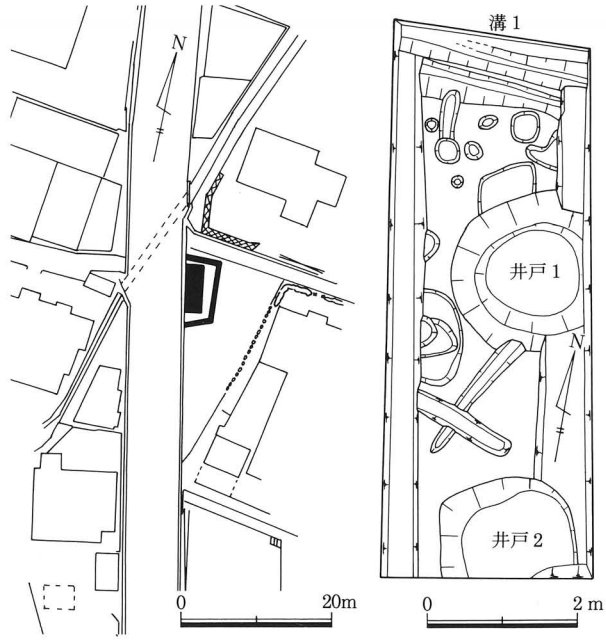
遺構は、全て地山上から検出した。溝３条、井戸２基、土坑３基、柱穴８個を検出した。

井戸１および２については、約１ｍの深さまで掘削したが、その底を確認することはできなかった。このため、大阪府下水道課と協議を行ない、井戸２基については、本体工事の際に今回の調査で掘削した深さまで機械で全体を掘削した後、再度調査を実施することになった。

これらの遺構からは、瓦器、羽釜、土師器皿等が出土した。時期的にはある程度の年代幅があるが、最終的には13世紀後半に、これらの遺構は廃絶したものと考えられる。



第56図　調査地位置図



第57図　調査区位置図・遺構平面図

第58図　調査区全景

男里（おのさと）遺跡（９７０５６）

（１）泉南市男里地内　　（２）600㎡
（３）平成９年12月10日～平成10年２月15日
（４）府営地域総合オアシス整備事業・泉南地区双子池改修　（５）上林 史郎

男里遺跡は、大阪府の南部、泉南市に位置する。双子池を中心に東西約1.1㎞、南北約1.3㎞の範囲に及び、泉南市最大の複合遺跡である。泉南市の地形は、他の泉南地域同様、和泉山脈から海岸線に向かって派生する丘陵、洪積段丘が大部分を占め、沖積地は樫井川と男里川の周辺に限定されている。このような地形的制約から農業用水の確保は、約100を数える溜池を中心とした水路網になっている。ただ、築造年代が古い溜池が多く、従来から補修・改修などの維持・管理が為されてきたが、近年堤体の漏水や取水施設の老朽化が顕著になってきた。そのため、溜池の保全や農業用水の効率的確保などから、大阪府農林水産部によって地域総合オアシス整備事業が開始された。

さて、男里地区における農業用水の確保先は双子池にある。双子池は、池のほぼ中央が市道によって分断されており、南側を上池、北側を下池と呼称されている。今年度の調査区は、下池の北東部に位置し、幅約６ｍ、総延長約100ｍをはかる。調査区の平面形態は、逆Ｌ字状を呈し、その北辺には北へ抜ける樋門部分も含んでいる。

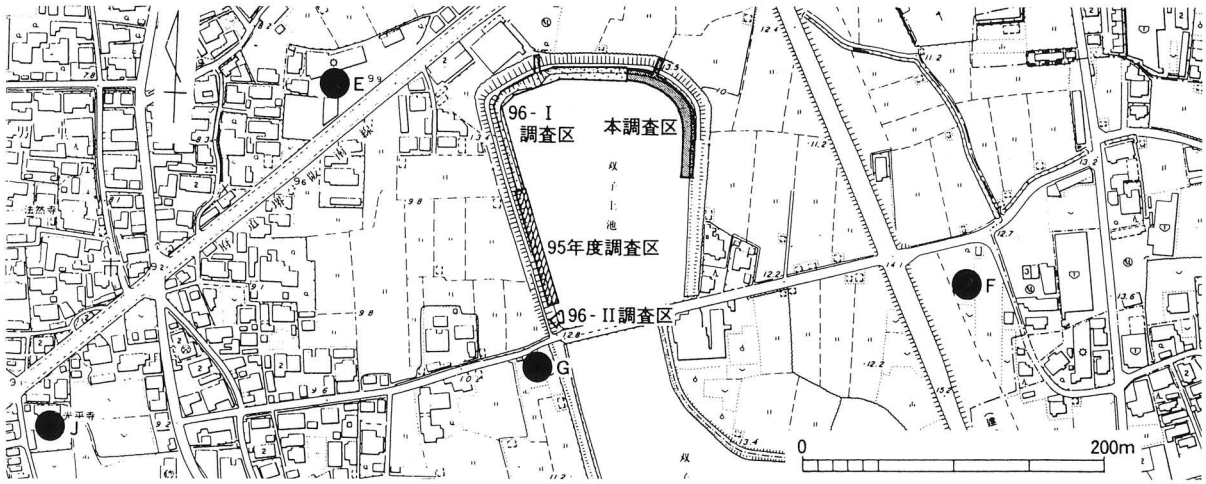
調査区の基本層序は、上層においてハガネ土を中心とする堤体構築に伴う盛土がみとめられ、その直下には包含層であるオリーブ黒色シルトが約20㎝の厚さで確認される。また、上層の盛土には、オリーブ黒色シルトのブロック土が多量に含まれていることから、堤体構築の際に大きく削平されたものと考えられる。地山は、黄褐色シルト及び暗褐色粘質土であり、北部ではT.P.＋8.9m前後、南部では若干高くなりT.P.＋9.2mをはかる。

現在の堤体の断面を観察すれば、地山上からT.P.＋10.8mまでの間には、砂及びシルトがほぼ水平に堆積している。さらに、その部分は還元しており、長い期間にわたって水の影響をうけていたものと考えられる。

遺構については、機械掘削時に遺構面を深く削平したため、明確なものは残存していない。ただ、自然流路や溝、土坑、ピットなどが一部みられる。自然流路は、調査区の南端で検出された。断面からその規模を推定すると、南北13m以上、東西６m以上、深さ1.2mをはかる。埋土は、黄灰色細砂を中心に褐色細砂、灰色細砂などが複雑に堆積している。流路底面のレベルは、T.P.＋7.8m前後であり、底面には河原石が多量に確認された。埋土からの遺物の出土はないため、流路の埋没時期は不明であるが、昨年度調査の流路１と関連するものかもしれない。

今回の調査では、時期不明の流路や溝、落ち込みなどが検出されているが、従来の調査成果により、鎌倉時代以降、双子池は古い流路を塞き止め、池堤を構築していたことが土層の堆積より判明している。それ以前の弥生～平安時代にかけては、幾本もの溝や流路が旧地形に沿う形で、東南から北西に向けて流れていたものと考えられる。

なお、今年度の調査の実施にあたっては、泉南市教育委員会の全面的な協力を得た。



第59図　調査区位置図

資料紹介－門真市普賢寺跡出土の密教法具

尾　上　　実

はじめに

普賢寺跡は門真市垣内町から幸福町にかけて広がる。京阪電鉄古川橋駅の駅前に当たる本遺跡では、区画整理事業などに起因する数度の調査によって、伽藍こそ確認されていないものの、多量の瓦を始め、柿経や絵馬なども出土しており、平安時代後期から室町時代にかけての寺院跡と考えられている（註１）。大阪府教育委員会が1984年に実施した小調査によっても貴重な資料として、一群の密教法具が出土している。報告書が未刊行であるが、最近は類例の出土もしばしば聞くところであり、この法具について簡単に紹介しておきたい。調査範囲がごく小さく、遺構については定かではないが、トレンチ内の包含層状堆積土の狭い範囲に固まって出土したとのことであり、一括性は高いと考えられる。

遺物

瓦や土器、さらには銅製小仏像なども出土しているがここでは省き、法具類のみを紹介する。いずれも鋳銅製で、轆轤痕を良く残すが、鍍金の跡は確認できない。

・六器

修法壇上で火舎香炉の両側に並べ、六口を一具として用いられる仏前供養の小椀。１～４は口縁部をやや外反させた体部に、直立する高台を伴う椀で、腰がかなり張っている。口縁端部は丸く肥厚するが、器壁はきわめて薄く、１では底部中央が上方に盛り上がり、２の底部は高台接合部のすぐ内側から下へ垂れ下がっている。３は底部と体部の破片で直接には接合できない。この３点は口径7.6㎝、器高3.4㎝、高台径3.6㎝程度のよく似た法量を示す。４は土圧によるものか、大きく歪んでいるが、口径6.8㎝、器高3.3㎝、高台径3.1㎝程度に復元できるやや小型品である。

５～９は浅い托皿に高く直立する高台を伴う台皿で、口径7.0㎝、器高2.0㎝程の、これもほぼ同様の法量を示す。器壁は椀に比べてかなり厚い。椀の高台が乗る受け部の直径はいずれも3.1㎝を計り、１～３の高台に整合する。一方、４は高台径が小さいため、これらの台皿上には置くことができない。本来同形態、同法量の六口がセットとして用いられるのが六器であるが、何らかの理由により欠失した分を、やや小型の代替品をあてて使用したものであろう。

・二器

道場や供養具を清める香水を入れる灑水器と、五体を清浄にする香抹の容器である塗香器は、同一の形態を持ち、その法量だけがやや異なる。併せて二器と呼ばれる。

甲盛り二層の中央に宝珠形の鈕を鋳出した10は、口径が8.2㎝、器高3.6㎝と、後述の椀より大きく、灑水器の蓋と考えられる。鈕の周囲には二条紐を巡らして鈕座を形造る。

11は六器よりやや深い形態を示す椀で、体部には二条紐を巡らす。口縁端部は外反しながら肥厚

第60図　普賢寺跡出土密教法具

する。口径6.8㎝、器高3.7㎝。浅い皿部と低い高台をもつ12は受け部の直径から判断しても、これに伴う台皿であろう。口径6.9㎝、器高1.5㎝。やや小型な点から、塗香器と考えられる。

・火舎香炉

修法壇の中央に据えられる焼香器。重層式の香炉で、体部は下層の火炉（14）と上層の甑（13）からなり、ともにその上端近くに幅の広い鍔を巡らす。蓋は発見されていない。火炉の立ち上がりの外面上下には二条づつの紐を巡らすが、甑外面の紐はそれぞれ一条づつである。また、火炉の底縁には3脚の猫足が付されている。脚は鋲止めされており、火炉内底面には鋲頭が大きく突出するが、外底面の脚部分は平滑に処理されている。口径8.1㎝、全高5.8㎝を計る。

時期

法具類の考古学的な編年作業は十分ではない。伝世品等に基く一般的な変遷観に従えば、六器の椀の器壁が薄く、古式を呈するにも関わらず、台皿のそれはかなり厚く高台も高い、火舎香炉は重層になっているが脚は猫足である、等の点から推せば鎌倉時代後期の所産とする事が妥当かと思えるが、詳細は将来的な検討に待ちたい。

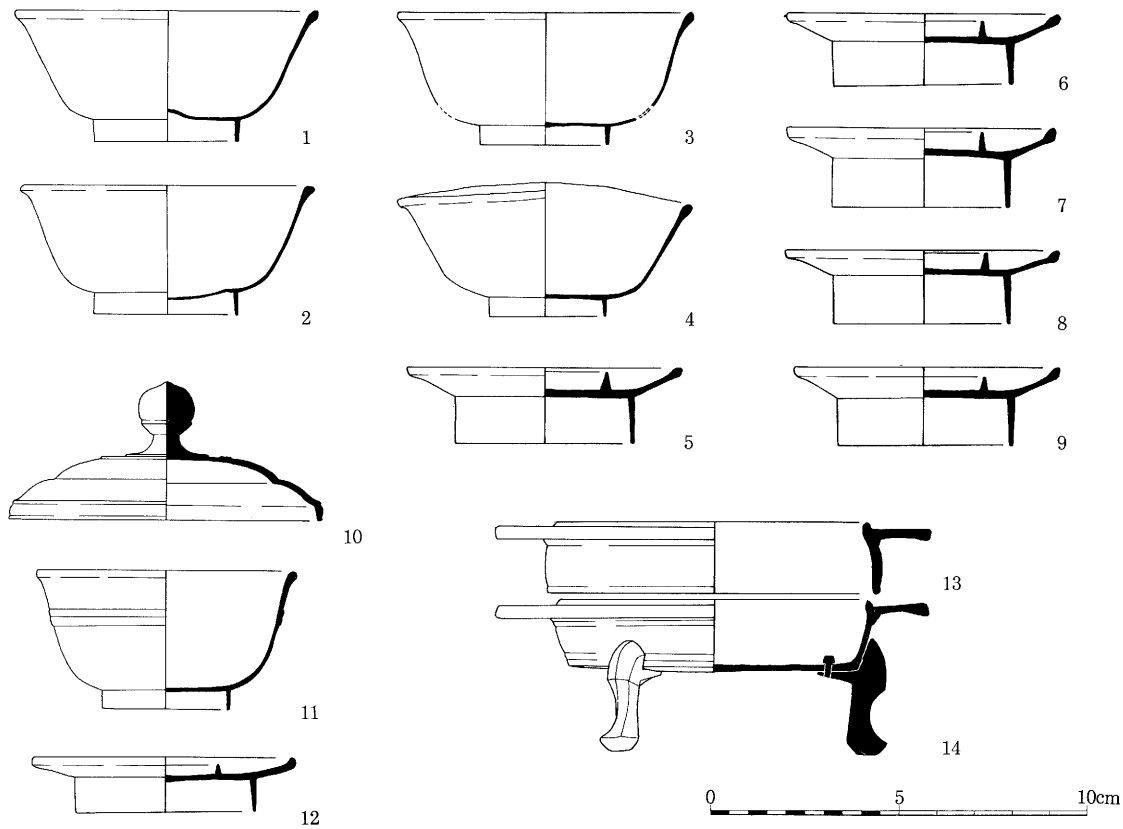
まとめ

普賢寺跡から出土したこれらの青銅器は、密教法具の中でも、修法に当たって道場を清め荘厳し、諸仏諸天の降臨を願ってこれを供養するための供養具の一部に当る。本格的な修法壇では、修法用の金剛杵や輪宝、金剛鈴などを置いた方形の壇の四面それぞれに中央の火舎香炉、その両側の六器をはじめ、二器や今回は発見されていない花瓶や飲食器を配し、四面器と呼ばれる。普賢寺跡から出土した法具類は、その数から見れば、壇の一面に配置する供養具に相当し、一面器と呼ばれる。やや簡略化した修法に用いられたものが一括埋納、あるいは廃棄されたものであろう。

大阪府下における類例としては、和泉市の槇尾山経塚から出土した、それぞれ2対の花瓶と六器が知られる（註2）。平安後期のこの資料と並んで、密教法具がセットとして把握された本例は、中世の寺院における仏教儀式のあり方を示す資料として重要なものであろう。

（註1）『普賢寺遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ』
門真市教育委員会　1990・1991

（註2）『和泉槇尾山経塚発掘調査報告書』
和泉市久保惣記念美術館　1983



第61図　普賢寺跡出土密教法具実測図

文化財調査事務所設立の沿革と建設の経過

芝野 圭之助・阪田　育功

基本構想の策定

文化財調査事務所設立の検討が行われたのは、昭和６３年に遡る。その当時の問題意識は、平成２年度に検討され３年度に決定した「大阪府における文化財保護行政の将来について」及び「府立文化財調査センター基本構想」の二つの報告に詳しく述べられている。「府立文化財調査センター基本構想」は「はじめに」で以下のように述べている。

大阪府は、文化をもって世界に貢献する文化首都大阪の実現をめざして『大阪文化振興ビジョン』を策定した。この中では、大阪が「わが国の歴史的文化圏の中心地であり、難波宮、近つ飛鳥をはじめわが国の歴史を実証する文化遺産の宝庫」であるという認識のもとに、「太古から連綿と続く大阪独自の文化的集積を再発見し、継承、活用することにより府民に『世界の歴史都市としての大阪』の自覚を促し、大阪のアイデンティティの確立を図る。」必要を述べている。

これらの文化財は、それぞれの時代を越えてその価値を保ち、地域の人々に守られて現代に引き継がれてきたものである。我々は、これらの歴史的遺産に触れることによって我々の地域の文化の継続性を実感することができるし、自分自身と自分を含む集団のアイデンティティを確認することができる。自らがよって立つ基盤とその歴史を正しく認識できてこそ次代に引き継ぐべき価値ある文化を識別し、それを基盤にして現代文化を創造してゆくことができるのである。　（中略）

このように大阪という地域の文化を正しく理解し、その文化ストックたる文化財を保存し、現代社会に活用することによってこそ、大阪文化が単なる地域文化の枠を越えて世界に開かれた文化首都としての実質を持ち得るといえるであろう。

文化財保護課においては「大阪文化振興ビジョン」策定と相前後して、文化財保護行政の将来について過去２回にわたって独自に課内検討を進めてきた。

昭和61年８月からは、財団法人大阪文化財センターとの埋蔵文化財発掘調査の事業分担の検討から出発したが、保護行政の歴史・他府県の状況・市町村行政の実態・国府市町村及び財団法人との機能分担・事業量の見通し・文化財保護課の組織など広範な内容にわたって検討された。その結果は今後の長期的検討のための問題提起として提示されたが、その後の検討が不十分で、文化財保護行政をトータルに検討しようとした積極性が生かされなかった。

昭和63年７月からは前回の検討から出発し、現状の分析と評価に重点をおいて討議を重ねた結果、一致して目指すべき実現可能な将来展望として、「府立埋蔵文化財センター」の必要性を提示した。この検討内容は文化財の多くの部門のなかの埋蔵文化財に限定したものであったため、文化財保護行政をトータルにとらえた将来構想としては不十分さを残した。

以上の経過をふまえ、本報告は「大阪文化振興ビジョン」の示す「歴史的ストックの継承と活用」という基本方向に則って、それを推進してゆくべき責任を負う文化財保護行政について総合的に現状を分析し其の将来方向を検討したものである。（以上『基本構想』から引用）

このような認識に基づいて検討した結果、当時の文化財保護行政をめぐる状況は次のようにまとめられている。

近年の大阪府における歴史的環境の変化は、大規模でしかも急激に進行しており、この急激な変貌によって埋蔵文化財、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物等の地域文化を構成してきた文化財総体が失われつつある。開発等によって生じる地域の急速な変化に対し、文化財を保護し地域の中で活用してゆくためには、総合的でしかも迅速に対応できる文化財調査体制の整備と拡充が必要である。

本府の埋蔵文化財保護行政においては、公共・民間を問わず様々な開発事業に対応するため、永年にわたり現地調査を優先してきた。その結果、調査によって得られた、貴重で豊富な成果を府民に対して公開し、社会的に活用することが、十分に行われていないばかりか、このための基礎作業である調査資料の整理及び調査報告書作成作業についても事実上先送りされてきた。また、埋蔵文化財調査の急激な事業量の増加は、指定・保護・普及活用等の事業を圧迫し、予算・人事配置・施設等のすべての面において極めて不十分な状態を作る原因となった。

文化財保護課では、このような問題を解決し、文化財保護行政の基本的事業である調査・保護・

普及啓発を総合的に実施してゆくため、それぞれの事業を独自に一貫して実施できる組織体制を確立し、また、それぞれの事業が相対的に独自性を発揮し事業として完結しながらも、同時に文化財保護行政の一環として相互に連携を保ち、ネットワークを構成するという基本方針を提示した。

以上の原則的な認識にたって埋蔵文化財のみならず総合的な文化財調査事業を独自に完結できる組織と施設として、「大阪府立文化財センター」が構想され、これが本調査事務所建設への出発点となった。（阪田）

建設の目的

文化財調査事務所は府下の埋蔵文化財の発掘調査及び民俗文化財等各種文化財調査・整理・保管・研究・報告書刊行作業・文化財資料の普及啓発等の拠点とすることを目的にして財団法人大阪府文化財調査研究センターと合築で堺市竹城台３丁21－４にある泉北第2収蔵庫の跡地の4,505㎡に平成７年11月から建設することとなった。

建設以前

それまでの作業は地域の大規模な開発工事の事前発掘調査用現場プレハブで行われてきた。出土した遺物・遺構の一部を資料化してその遺跡の概要書を作成し、調査工期末に地元府民を対象とした現地説明会を開いてきた。埋蔵文化財の発掘調査は臨時の行政需要として位置付けられ、府下のその他の文化財資料についても、収蔵・整理・研究等はままならない状態であった。調査成果を報告書として刊行するための整理事業や、資料を活用した講演会などを行って、文化財情報を府民に還元すること等は夢のような話であった。

建設

A．第１段階（調査計画）

昭和60年頃からすすめられてきた府立博物館ネットワーク構想や博物館建設作業に続いて平成３年度から文化財調査事務所建設の調査費が認められ、平成４年度に基本計画作成費が予算化された。このころ同時に建設用地の問題や、財団法人大阪文化財センターの整理・保管施設の問題などが議論されていた。建物の用途や性格、作業の流れやエリアの面積根拠等の積み上げが行われ、当初は7,000㎡～9,000㎡の大規模な案も検討されていた。財源についても国の補助金や、事業者からの費用なども検討された。平成４年にはアスベスト使用建物であった泉北考古資料館第二収蔵庫解体移転のため、中央環状線長田ジャンクションの高架下に東大阪文化財収蔵庫建設が本格化し、土地借用の協議も進められ、地元の開発指導部局や環境指導部局との綿密な協議が行われた。

B．第２段階（移転作業と基本設計）

このような準備の後、平成５年度には収蔵庫建築工事が開始され、平成６年度は泉北考古資料館第二収蔵庫の約７万箱のコンテナの移転・第二収蔵庫本体の解体・撤去工事が行われた。泉北考古資料館第二収蔵庫を解体して東大阪文化財収蔵庫に移転する際、現状どおりとされた。近畿自動車道の建設に伴う発掘調査で出土した文化財資料を保管するため（財）大阪文化財センターの長田分室も解体・移転し東大阪文化財収蔵庫に隣接して中部事務所が誕生した。そしてまもなく、阪神大震災が起こった。コンテナが倒れ、窓ガラスも一部破損した。その間に文化財調査事務所の面積も決まり、敷地造成工事・杭打ち工事の当初予算が認められたのである。

C．第３段階（実施設計）

基本設計図は、一辺24mの立方体を２つ南北に並べた建物の南側に、45度角度を振った一辺24mの立方体が接するデザインで、南側に事務機能、北側に収蔵機能を配置することを基本としている。３階の入口を入ると、ロビーの吹き抜け西南の逆三角形の窓から泉北１号線の光明池方面が見渡せ、調査室と職員室を結ぶ南北通路はライトコート（中庭）の植栽が見え、泉北丘陵から信太山丘陵が望める。設計された調査事務所の部屋割りは１階に入口ホール・展示ロビー（基準資料室）・講義室・図面収蔵庫・第１文化財収蔵庫（民具収蔵庫）・第１整理室（水洗室）等、２階に大阪府職員室・第２整理室（芸術文化整理室）・第３整理室（文化財調査室）・第２文化財収蔵庫・特別収蔵庫・写真撮影室・暗室・写真収蔵庫等、３階に会議室・（財）大阪府文化財調査研究センター職員室・同調査室等。これらの基本設計図に基づき具体的に、ホール１階の展示・仮収蔵庫の木器水槽・土器水洗流し場・コンピューター室・書庫・特別収蔵庫・基準資料室・植栽・案内板文字デザイン・エレベーター・電波障害の地元説明等様々な項目の構造・規模・内容等の詳細設計が検討された。全体としては予算的に維持管理費を安くするため収蔵庫部分を多くして、維持設備費の少ないように配慮された。

D．第４段階（建築工事）

平成７年度当初は各部屋の面積が決定し、杭打ち工事費も認められていたため、おおむね建築本

体工事費も９月補正で認められるであろうと安心していたが杭打ち工事は認めるが、本体建設を次年度に繰り越して不都合かどうかの再検討が提起された。建物についても、内容の再検討と、構造の鉄筋コンクリートから鉄骨への見直しとそれに伴う杭長の再検討等で工事費の圧縮も求められた。建築通知がすでに堺市に提出され、消防や、道路専用の許可申請手続きが並行して行われていたので、ここで、建築工事が次年度に繰り越されると、当初から全ての申請作業を繰り返すことになると共に、財団法人大阪文化財センターとの調整も振り出しに戻りかねない。なにより、次年度はさらに、財政危機が進行し、この事業が凍結されてしまいかねない状況であったため、次年度に引き続き建物本体工事着手の確認を条件に杭工事と建物本体工事が２ヶ年にまたがることを了解して、計画の変更等に対処していった。

諸条件が整い、平成７年度補正予算で工事着手費が確保され、大阪府教育委員会文化財調査事務所は文化財の試掘調査も行い、平成７年11月から建設工事に着手し、平成９年３月の竣工に向けスタートした。建築工事は具体的に進行するあいだに様々な問題点が出て、現地で何度も打合せが行われた。建築業者・設備業者・電気業者・建築監理協会のそれぞれの担当者・営繕室の設計係・工事係・電気設備係・衛生空気調整担当等、常に多人数で行われた。ドアの把手の位置や鍵の開け閉めの裏表、特別収蔵庫の天井の高さ、写真室の配線やコンセントの位置、南側外構の石棺の配置、その他実際に施設を現場へ建てるための検討がくりかえされた。

同時に組織人員の問題、管理基準、資料化のためのデーターの統一基準の検討、報告書作成のためのプログラム等も行われた。そして平成８年度当初予算要求作業も始まった。

①過去の調査で得た遺物や写真・図面資料の収蔵・保管・公開するための遺物整理事業
②専門家研究者を招き、考古学行政担当者等の為の研修事業
③報告書として刊行するための遺物整理事業備品購入と移転費用及び管理運営のための警備委託費・メンテナンス費用

等の資料要求がなされ、その為の根拠資料作りが果てしなく行われた。写真画像処理装置などの緊急を要する設備の購入等も要求したが、財政状態が赤信号となっており、認められなかった。しかし、今日の状況は更に悪化しており、いつまで続くか果てしない状態である。備品は極力いままで使用していたものをを使うようにし、遺物の運送と備品の運送を同時に行うスケジュール作成にも頭を痛めた。

竣工

A．引っ越しとメンテナンス

ごたぶんにもれず工期末になって、建築現場は突貫工事である。工事のスケジュールと備品発注や警備、引っ越しなどの積算、発注、契約事務、業者決定後ただちに備品の現場設置や警備委託設備装置設置作業と既存事務所からの引越作業と建築作業、更に各工種の竣工検査のスケジュール調整が多岐にわたり戦場のようになった。とにかく４月１日にはオープンすることができた。

B．瑕疵補修

竣工して引き渡しをうけたが、空調機からの漏水、ペンキの塗り忘れ、ドアの開閉不良、外壁の亀裂、コーキング不良、講義室空調機の排水不良、廊下ガラス窓際の雨漏り、水洗室・図面収蔵庫等の雨漏り、基準資料室の床フローリングの盛り上がり、廊下床シートの盛り上がり、特別収蔵庫の空調装置の不調、ロールブラインドの巻き込み不良、民具民俗収蔵庫の会所の詰まり、等が指摘された。基本テーマは「水と湿気」をどう防ぐかである。逐次補修されたが、平成10年９月22日の台風７号は全ての不備、矛盾点を指摘してくれた。

組織

文化財調査事務所は、大阪府教育委員会の組織上は、文化財保護課分室と位置づけられている。平成10年３月現在の体制は以下の通りである。

主幹１
調査第１係
　　係長１・主査１・主任技師１・技師８
調査第２係
　　係長１・主査１・主任技師２・技師７
資料係
　　係長１・主査１・主任技師２・技師１

さいごに

とにかく文化財保護課の考古学技師の全てが何らかの形でかかわった文化財調査事務所が出来上がった。結果はともかく、永年希求してきた調査と整理の拠点ができた。21世紀に向けての文化財行政の起点として、大いに活用して、その役割を果たし、その足跡を記していかなければならない。

（芝野）

文化財調査事務所における資料の整理と収蔵

阪田育功

基本方針

4月1日をもって開設された文化財調査事務所では、従来各地域の事務所を基点に実施していた調査・整理及び資料管理を改め、調査・整理・資料管理部門をすべて集中して業務を行うという大きな変革を実施した。

これに伴い、調査・整理作業の実施方針、資料の収蔵・管理方針も新たに策定することが必要となり、そのための検討が調査第1係・調査第2係を中心に、事務所開設の2年前から行われた。

2年間にわたる討議・検討の結果、整理作業の実施については新設予定の資料係が調査事務所において統一的に実施する事となり、調査担当係との業務分担の詳細についても確認した。すなわち、資料係は洗浄・注記等の基礎作業、その後調査担当者の選択に基づく復原・実測、調査担当者のレイアウトによるトレース作業を担当し、調査係は、現地発掘調査のほか、遺物整理では復原・実測遺物の選定、図版のレイアウト及び、遺構・遺物の原稿執筆をすることとした。調査と並行して実施する整理作業を円滑に行うため、現地発掘調査における調査記録の取り方についてもいくつかの点を申し合わせた。その内容は以下のとおりである。

1．すべての調査に調査番号を与え、以後の整理の基本番号とする。
2．遺構番号は遺構の種類に関係なく続き番号で表記する。
3．地区割は10メートルを1区画として、所定の方式により表示する。
4．遺物ラベルと写真撮影の写し込みラベルを新たに作り、記入方法を統一する。

また、報告のありかたについては、「年報」を作成して、すべての調査を報告するとともに、従来の概要報告を改め、基本的には報告書の作成を行うこととした。概要報告は、国庫補助事業およびその他の調査について必要に応じて作成することとした。

調査資料はすべて資料係が管理することとし、特に、大量に保管している遺物については、調査事務所での収蔵可能量と利用の頻度を考慮して、以下の通りその取り扱いを定めた。

A．調査事務所基準資料室に展示するもの
①弥生土器の編年基準資料
②埴輪の編年資料

B．調査事務所収蔵庫に保管するもの
①年代決定の基準資料となるもの
②整理作業途中の遺物

C．調査事務所特別収蔵庫に保管するもの
①Bのうち、保存処理済み金属器・木器等、恒温恒湿での保管を必要とする遺物

D．調査事務所仮収蔵庫に保管する遺物
①整理作業中の遺物
②概報作成済みで今後遺物整理事業が予定されている遺物

なお、基準資料室は（財）大阪府文化財調査研究センターと共用であるため二者で協議しつつ、Aの①を（財）大阪府文化財調査研究センターが、②を府教委が担当して展示することとした。

また、大阪府の場合、出土例が少ない旧石器・縄文時代の資料はすべて収蔵することとし、それ以外は調査担当者からあげられた基準資料リストに基づいて内容を決定し、各地域事務所で該当遺物の確認にあたることとした。当初リストに挙げられていない遺物でも、資料的な価値が高く活用の可能性がたかく地域事務所の状況等を考えて調査事務所に搬入すべきと判断したものも随時追加していった。各地域事務所からの搬出が可能となった遺物については、個体別のリストを作成し、可能な限りパソコンにデータを入力することとした。

上記以外の遺物は、東大阪収蔵庫・摂津収蔵庫および地域事務所として使用していた建物を泉北収蔵庫・大井収蔵庫において収蔵管理することとなった。結果として、1遺跡の出土遺物の収蔵場所が分散することとなるため、各収蔵庫における収蔵品のリストを作成することとし、東大阪収蔵庫・志紀収蔵庫では前年度からリスト作成作業に着手した。各収蔵庫での作成リストの内容は、コンテナ箱書きの内容をすべて書き取ることとし、データとして必ず記録することとした。

調査記録はすべて調査事務所に搬入することとした。但し、各地域事務所においては、航空写真測量の成果品とともに、関連する陽画焼きの校正図面・作業図面が多量に保管されていた。これらは、遺構番号等の必要なデータが含まれないことを確認した後、廃棄することとした。

調査事務所への資料の搬入

資料の搬入は、平成9年3月に各事務所ごとに順次実施した。各事務所の所在地・搬入日程・搬入方針は以下のとおり。

泉北事務所
高石市綾園4丁目先泉北有料道路高架下
3月10・11・12日
高架橋脚補強工事のため12月から3月閉鎖
大井事務所
藤井寺市西大井大阪府大井下水処理場用地内
3月24・25・26日
倉庫の老朽化のため、一括資料はできるだけ調査事務所に移動
摂津収蔵庫
摂津市鳥飼中1丁目
3月27・28日
収蔵庫として整理
長吉事務所
八尾市南亀井町大阪府長吉ポンプ場内
3月17・18・19日
3月末で閉鎖
外環高架下収蔵庫
藤井寺市古室3丁目国道170号線高架下
基準資料を選別して大井事務所で整理後、調査事務所に搬出
能勢事務所
豊能郡能勢町山辺
遺物は能勢町教育委員会事務所で保管
東大阪収蔵庫
東大阪市長田東1丁目
3月14日
民俗資料を薫蒸・搬入
府庁文化財保護課・同分室
大阪市中央区大手前2丁目
3月19日（図書）
3月29・30日（備品）

収納

それぞれの資料の収蔵場所はあらかじめ決めていたが、収蔵庫内での配置は、仮収納の後、再度内容を確認整理したうえで最終的な収納位置を決定して収納することとした。

A．遺物

基準資料は展示計画に基づいて基準資料室展示ケースに収納したもののほかは、2階文化財収蔵庫に収納した。収納にあたっては、搬出時につけたコンテナ仮番号に従って仮収納することとし、時代別に再整理したのち最終的な収納位置を決定することとした。その他の遺物のうち整理途中のものは1階仮収蔵庫に収納した。

B．写真

航空写真・カラースライド・ネガに分類したうえで調査ごとに年度順に収納することを基本とした。小規模国庫補助事業に対応した整理方式である遺跡別・年代順次収納したのものは、その方式のものをまとめて収納し検索できるようにした。

C．調査図面等

その他の調査資料はすべて図面収蔵庫に収納した。調査図面は筒に収納されているものと、ファイルに収納されているものをそれぞれ、地域ごと・調査年度順に棚に収納した。

D．図書

埋蔵文化財関係の調査報告書は府内は市町村ごとに、他府県は府県別に収納した。文化財保護課での受け入れ番号とは別に調査事務所での登録番号を付して順次登録した。その他は日本十進分類法に基づく図書分類番号に従って収納した。

E．民俗資料

東大阪収蔵庫に保管されていた資料で、調査事務所に搬入した資料は以下のとおりである。

・谷口家資料　河南町馬谷の農家
　農具・生活用具・蚕棚等　221点
・上辻家資料　富田林市西板持の農家
　農具・生活用具　132点
・守田コレクション　全国の民具等　約200点
・上平家資料　金物・桶作り用具　150点
・畑野家資料　漆刷毛製造用具・材料　68件
・三宅家資料　軍馬用の蹄鉄・同箱
・大恩寺資料　大阪市淀川区三津屋南
　輿・雨具・笠など仏教法会用具
・前西家資料　泉南市信達の農家
　漆器類　22件

以上、平成9年度中に収納した資料の数は以下のとおりである。

A．遺物－2階文化財収蔵庫　1,483箱

B．写真－写真収蔵庫

スライド	2,476冊
ネガ	3,049冊
航空写真	678冊

C．調査資料－図面収蔵庫

図面ファイル	2,661冊
空測等図面筒	1,566本
遺物台帳等	1,714冊
測量成果簿	303冊
分析成果報告書	234冊
地図等	230件
航空写真パネル	214点

D．図書－書庫　23,456冊

E．民俗資料　前掲

普及啓発・広報事業

阪田育功

資料の貸出

収納した資料は、調査事務所における調査報告書作成等に随時利用したほか、他機関からの借用依頼に応えて貸し出しを行った。貸出・資料掲載許可等の事務は文化財調整係が、遺物の受渡し・貸出写真資料作成等の実務を調査事務所資料係が担当した。

巻末に、他機関への長期貸出資料・短期貸出資料、出版物等への掲載を許可した資料、調査事務所における資料閲覧状況を、一覧表で掲げる。

府立弥生文化博物館及び近つ飛鳥博物館での常設展示等のために、両博物館に対しての長期貸し出し扱いとしていた資料については、事務の簡素化と、博物館での活用の拡大を図るため、各府立博物館保管資料として位置づけ、各館において貸し出し事務等をおこなうよう改めた。（平成10年4月1日施行）

調査事務所施設の利用

講義室においては、以下の会議及び、研究会・研修会が開催されたほか、月例の技術職員全体会議のあと、当調査事務所が実施した発掘調査のスライド検討会が行われた。

A．会議

・平成9年7月5日
第36回大阪府下埋蔵文化財研究会
「古代の交通と寺・集落を考える」
参加125名

・平成9年10月3日
全国埋蔵文化財法人連絡協議会第3回近畿ブロック研修会
参加85名

・平成9年11月6日
近畿2府4県文化財主管課長会議
参加20名

・平成10年3月20日
平成9年度第2回大阪府市町村文化財行政主管課長会議
参加71名　府職員10名

B．調査スライド検討会

・平成9年9月17日
辻本　武　能勢町野間遺跡の調査
阪田育功　堺市陶邑窯跡群の調査
上林史郎　泉南市男里遺跡の調査

・平成9年10月15日
山田隆一　堺市陶器南遺跡の調査
佐久間貴士　寝屋川市池田西遺跡の調査
横田　明　兵庫津遺跡の発掘調査

・平成9年11月19日
西川寿勝　和泉市池上曽根遺跡の調査
杉本清美　寝屋川市高柳遺跡の調査

・平成9年12月17日
地村邦夫　東郷遺跡・寺川遺跡の調査
酒井泰子　茨木市総持寺遺跡の調査

・平成10年1月21日
岡本敏行　長田神社境内（神戸市）、業平遺跡（芦屋市）の調査
亀島重則　八尾市田井中遺跡の調査

・平成10年2月18日
小浜　成　藤井寺市盾塚・鞍塚古墳の調査
枡本　哲　最新シベリア考古学事情

・平成10年3月18日
藤田道子　河南町寛弘寺遺跡の調査（農地開発事業に伴う）
今村道雄・林日佐子
河南町寛弘寺遺跡の調査（国道309号線富田林バイパス工事に伴う）

C．現地説明会及び報道発表

①現地説明会

・平成10年2月28日　みかん山古墳群
5世紀の古墳2基・6世紀の古墳
参加360人

・平成10年2月28日　高柳遺跡
平安時代の集落跡
参加200人

・平成10年3月7日　余部遺跡
溝で区画された中世の屋敷地と鋳造遺構
参加300人

・平成10年3月14日　池上曽根遺跡
弥生時代の方形周溝墓
参加270人

②報道発表資料提供

・平成9年11月26日
総持寺遺跡出土
「調」刻字須恵器（6世紀中頃）

資料の貸出・掲載・閲覧

長期貸出資料

貸出・展示先	貸出品	出土遺跡
能勢町歴史資料室	弥生土器9点　土師器7点　須恵器5点	大里遺跡
	石包丁4点　石斧3点　石鏃6点　他2点	
	須恵器1点	上椿遺跡
	円面硯など4点	尾道遺跡
	黒色土器2点　土師器小皿3点	九ノ坪遺跡
	瓦器碗7点　土師器皿4点　須恵器破片等	余野城遺跡
藤井寺市立図書館展示室	小型修羅	三ツ塚
太子町立竹ノ内街道歴史資料館	須恵器等一括資料	一須賀古墳群Q1号墳
	銀製帯金具（複製）	伽山古墓
国立歴史民俗博物館	石包丁3点	池上曽根遺跡
大阪府立ドーンセンター	陶磁器・金属器等	大坂城跡
吹田市立博物館	軒瓦　緑釉瓦　窯道具など	吉志部瓦窯
吉志部神社	複弁八葉蓮華文軒丸瓦他瓦3点　とちん2点	吉志部瓦窯
大阪府立玉川高等学校	弥生土器5点	稲葉遺跡
大阪府立大手前高等学校	陶磁器・瓦・金属器等14点	大坂城跡

短期貸出・掲載許可資料

依頼者	貸出・掲載	写真・遺物	種類	遺跡名	内容
有限会社メディアミューズ	掲載	写真	カラーポジ	陶邑窯跡群TG225号窯	須恵器四耳付甕
藤井寺市教育委員会	掲載	写真	モノクロプリント	三ツ塚	修羅出土状況写真
			モノクロプリント	国府遺跡	第3号人骨
			モノクロプリント	国府遺跡	旧石器
大阪府立弥生文化博物館	掲載	写真	カラーポジ	池上曽根遺跡	銅鐸片2点
				池上曽根遺跡	方形周溝墓
				要池遺跡	有鉤銅釧
大阪狭山市教育委員会	掲載	写真		葉室組	三十三度行者セタ開帳風景等5点
藤井寺市教育委員会	掲載	写真	モノクロプリント	三ツ塚	修羅出土状況写真
				大師山古墳	鍬形石と車輪石
				松岳山古墳	長持形石棺
				津堂城山古墳	長持形石棺
株式会社郷土出版社	掲載	写真		箕面滝付近の経塚	経塚出土品
角川文化振興財団	掲載	写真	モノクロプリント	池上曽根遺跡	弥生土器龍絵画土器
					鳥形木製品
					弥生土器龍絵画土器
株式会社フィルムアート社	掲載	写真	カラーポジ	深田遺跡	須恵器樽型甕
株式会社世界文化社	掲載	写真	カラーポジ	池上曽根遺跡	鳥形木製品
					弥生土器龍絵画土器
工業調査会	掲載	写真		三ツ塚	修羅出土状況写真
株式会社講談社	掲載	写真	モノクロプリント	池上曽根遺跡	弥生土器龍絵画土器
			カラー	池上曽根遺跡	弥生土器龍絵画土器
藤井寺市教育委員会	掲載	写真	モノクロプリント	津堂城山古墳	竪穴式石槨と長持形石棺
				津堂城山古墳	石棺出土状況
				津堂城山古墳	さしば形埴輪
				はさみ山遺跡	旧石器時代住居跡検出状況
茨木市教育委員会	掲載	写真	カラー	新庄遺跡	弥生前期土器・平安時代出土土器
弥生文化博物館	掲載	写真	不明	池上曽根遺跡	男茎型木製品 鳥形木製品
寝屋川市教育委員会	掲載	図面	トレース図	讃良郡条里遺跡	土器他4点
					土器他882点
株式会社郷土出版社	掲載	図面	実測図	二子塚古墳	外形実測図
茨木市教育委員会	掲載	図面	分布図	総持寺遺跡	古墳の分布図
大阪狭山市教育委員会	貸出・撮影	遺物	埴輪	西小山古墳	円筒埴輪
太子町教育委員会	貸出・撮影	遺物	土器	寛弘寺遺跡	弥生土器壺等23点
太子町教育委員会	貸出・撮影	遺物	土器	神山遺跡	弥生土器等11点
大阪府立弥生文化博物館	貸出・撮影	遺物	木製品	池上曽根遺跡	男茎型木製品3点
大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出・撮影	遺物	金属製品	国府遺跡	金製垂飾付耳飾り
			金属製品	寛弘寺2，5号墳	金、銀環2点
			玉	堂山古墳	ガラス丸玉、管玉2連
			金属製品	堺環濠都市遺跡	柄鏡
			金属製品	大園遺跡	八稜鏡
大阪府立弥生文化博物館	貸出	遺物	金属製品	国府遺跡	巴型銅器
			土器	八尾南遺跡	土師器甕讃岐系
			金属製品	崇禅寺遺跡	素環頭鉄刀
高崎市教育委員会	貸出	遺物	土器	陶邑窯跡群TK73号窯	須恵器杯身等8点
			土器	堂山1号墳	須恵器有蓋高杯身等4点
			土器	陶邑窯跡群TK87号窯等	須恵器28点
			土器	檜尾塚原9号墳	須恵器長頸壺等4点

大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出	遺物	石製品	愛宕塚古墳	家型石棺蓋片2点
			金属製品	寛弘寺古墳群	2次1区SB01出土鉄釘
			金属製品	寛弘寺古墳群	7次5区木棺墓出土鉄斧
			金属製品	寛弘寺古墳群	52号墳1次1区出土刀子
			金属製品	寛弘寺古墳群	42号墳8次2区出土鉄鏃
			金属製品	寛弘寺古墳群	37号墳7次5区出土鉄鏃
			埴輪	東郷遺跡	特殊器台片
大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出	遺物	埴輪	応神陵古墳外提	円筒埴輪3点
香芝市二上山博物館	貸出	遺物	石器	城山遺跡	打製石剣2点
			石器	甲田南遺跡	打製石剣
			石器	田井中遺跡	サヌカイト土坑407出土15点
			石器	寛弘寺遺跡	サヌカイト竪穴式住居3010出土34点
香芝市二上山博物館	貸出	遺物	石器	今池遺跡	槍先形石器10点等計17点
大阪府立弥生文化博物館	貸出	遺物	金属製品等	大坂城跡	小柄・こうがい・短刀等6点
			木製品	大坂城跡	下駄・碁石・縄・瓦
			木製品	大坂城跡	漆器椀一式
			陶磁器	大坂城跡	国産陶磁器豊臣時代一式
			自然遺物	大坂城跡	動植物依存体一式
大阪府立弥生文化博物館	貸出	写真	カラーネガ	亀井遺跡	全景(航空写真)
			35mmスライド	亀井遺跡	環濠出土状況
高崎市教育委員会	貸出	写真	カラーポジ	陶邑窯跡群	須恵器集合写真初期須恵器(TK73窯)
			カラーポジ	陶邑窯跡群	須恵器集合写真第Ⅰ～Ⅴ型式
			カラーポジ	陶邑窯跡群TG61号窯	TG61号窯移築復原
高崎市教育委員会	貸出	写真	カラーポジ	堂山1号墳	須恵器集合写真他4点
藤井寺市教育委員会	貸出	写真	カラープリント	寛弘寺遺跡	弥生後期集落跡の検出状況(空中写真)
			カラーポジ	瓜生堂・鬼虎川遺跡	木で作られたさまざまな形の農具
太子町教育委員会	貸出	写真	モノクロプリント	羽曳山	銅鐸4カット
			35mmスライド	寛弘寺遺跡	小銅鐸出土住居(南部丘陵SB24出土)
			カラーポジ	寛弘寺遺跡	小銅鐸出土状況
			カラーポジ	寛弘寺遺跡	小銅鐸
			モノクロプリント	寛弘寺遺跡	鉄鏃(南部丘陵SB16出土)
			モノクロプリント	寛弘寺遺跡	手鎌(南部丘陵SB21出土)
			モノクロプリント	寛弘寺遺跡	鉄鏃(南部丘陵SB21出土)
山本善稔	貸出	写真	モノクロプリント	大坂城三の丸跡	丸瓦の下水管出土状況
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館	貸出	写真	カラーポジ	陶邑窯跡群	須恵器集合写真初期須恵器(TK73窯)
宮崎県総合博物館	貸出	写真	カラーポジ	蕃上山古墳	意須比の巫女
大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出	写真	カラーポジ	応神陵古墳外提	笠型木製品
雄山閣出版株式会社	貸出	写真	カラープリント	一須賀古墳群	I支群全景
			35mmスライド	一須賀古墳群I－18号墳	I－18号墳石室
			モノクロプリント	一須賀古墳群I－18号墳	土師器把手付鉢
			モノクロプリント	一須賀古墳群I－19号墳	ミニチュア竈
株式会社学生社	貸出	写真	モノクロプリント	唐櫃山古墳	唐櫃山古墳石棺
柏原市教育委員会	貸出	写真	35mmスライド	田辺廃寺	東塔跡基壇全景
			35mmスライド	田辺廃寺	東塔跡基壇外屋瓦出土状況
			35mmスライド	田辺廃寺	西塔跡基壇東縁
藤井寺市教育委員会	貸出	写真	モノクロプリント	萱振遺跡	萱振1号墳の埴輪検出状況
			モノクロプリント	御旅山古墳	葺石と壺形埴輪列検出状況
新人物往来社	貸出	写真	モノクロプリント	総持寺遺跡	須恵器「調」の刻字土器
戸田市長	貸出	写真	カラーポジ	陶邑窯跡群	須恵器集合写真初期須恵器(TK73窯)
株式会社郷土出版社	貸出	写真	カラーポジ	法蓮坂遺跡	銅印3カット
株式会社郷土出版社	貸出	写真	モノクロプリント	宮之前遺跡	第2調査区
			モノクロプリント	宮之前遺跡	第8号方形周溝墓土器出土状況他4点
明石市教育委員会	貸出	写真	カラーポジ	はさみ山遺跡	旧石器時代住居跡検出状況
石神怡	貸出	写真	モノクロプリント	西町奉行所跡	西町奉行所跡遺構写真
京都府京都文化博物館	貸出	写真	35mmスライド	はさみ山遺跡	墓壙状遺構
有限会社新創社	貸出	写真	カラーポジ	三ツ塚	修羅出土状況写真
吉武立雄	貸出	写真	カラープリント	三ツ塚	修羅出土状況写真
株式会社小学館	貸出	写真	カラーポジ	陶邑窯跡群	須恵器集合写真初期須恵器(TK73窯)
大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出	写真	カラーポジ	はさみ山遺跡	旧石器時代住居跡検出状況
株式会社小学館	貸出	写真	モノクロプリント	総持寺遺跡	須恵器「調」の刻字土器
香芝市二上山博物館	貸出	写真	35mmスライド	田井中遺跡	土坑407遺物出土状況
			35mmスライド	寛弘寺遺跡	竪穴式住居3010全景(北から)
			35mmスライド	寛弘寺遺跡	竪穴式住居3010石材貯蔵穴全景
			35mmスライド	今池遺跡	第2地点全景(南から)
藤井寺市教育委員会	貸出	写真	モノクロプリント	総持寺遺跡	須恵器「調」の刻字土器
雄山閣出版株式会社	貸出	写真	カラーポジ	堂山1号墳	須恵器集合写真
雄山閣出版株式会社	貸出	写真	モノクロプリント	一須賀古墳群I－5号墳	須恵器出土状況他3点
橋本久和	貸出	写真	モノクロプリント	総持寺遺跡	SK1384遺物出土状況他8点
大同メタル工業株式会社	貸出	写真	カラーポジ	三ツ塚	修羅出土状況写真
光洋精工株式会社	貸出	写真	カラープリント	三ツ塚	修羅出土状況写真
株式会社新創社	貸出	写真	カラーポジ	総持寺遺跡	須恵器「調」の刻字土器
筑紫野市史編集委員会	貸出	写真	モノクロプリント	はさみ山遺跡	旧石器時代住居跡検出状況
株式会社文渓堂	貸出	写真	カラーポジ	三ツ塚	修羅出土状況写真

大阪府立弥生文化博物館	貸出	写真	カラーポジ	大坂城跡	木簡慶長三年銘
			カラーポジ	大坂城跡	鋸
			カラーポジ	大坂城跡	三の丸石垣
			カラーポジ	大坂城跡	三の丸の塀と堀
			カラーポジ	大坂城跡	屋敷跡豊臣前期
			カラーポジ	大坂城跡	石山本願寺時代の遺構
			カラーポジ	大坂城跡	大坂城周辺航空写真

閲覧資料

所属	資料内容	遺跡
香芝市立二上山博物館	旧石器	八尾南第3地点　南花田　今池
香芝市立二上山博物館	旧石器	八尾南第3地点　南花田　今池
(財)大阪府文化財調査研究センター	調査図面	志紀
(財)大阪府文化財調査研究センター	調査図面	志紀
和泉市教育委員会	調査カード	和泉市内歴史の道
立命館大学	円筒埴輪	林　青山　具足塚
(株)現代手織研究所	弥生土器　埴輪	基準資料室
太子町立竹内街道歴史資料館	弥生土器他	寛弘寺　東山
狭山池ダム資料館準備室	土器	平尾
京都府立大学	土馬	土師の里　国府　茶山
奈良大学	土製円盤・紡錘車	甲田南
帝塚山大学	瓦	正法寺
奈良大学	弥生土器	巨摩
泉大津市教育委員会	移築瓦窯	更良岡山
(財)大阪市文化財協会	韓式土器	萱振
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	土師器	萱振
奈良大学	調査図面	寛弘寺古墳群
鳥取県埋蔵文化財センター	瓦塔	鶴田池東
奈良大学	紡錘車	甲田南
府立大東高校	手焙形土器	雁屋
弥生文化博物館	写真資料	大坂城
奈良国立文化財研究所	瓦	大山　八下　向泉寺
島根県教育庁文化財課	円筒埴輪等	萱振1号墳
帝塚山大学	軒丸瓦	正法寺
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	弥生土器他	基準資料室
個人	弥生土器他	基準資料室
近つ飛鳥博物館	磚　銅釘	初田古墳他
個人	形象埴輪	総持寺　更良岡山
愛知県立陶磁資料館	陶磁器等	堺環濠都市　三軒屋
(財)土岐市埋蔵文化財センター	陶磁器等	堺環濠都市　三軒屋
松洞窯	陶磁器等	堺環濠都市　三軒屋
浜松市博物館	弥生土器	田井中
柏原市教育委員会	絵図他	白山家資料
狭山池ダム資料館準備室	瓦	KM28ほか

大阪府教育委員会文化財調査事務所年報2
発行日　1999年3月10日
発　行　大阪府教育委員会
編　集　大阪府教育委員会文化財調査事務所
印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所